

クイック スタート ガイド

クイック スタート ガイド

目次

このクイック スタート ガイドでは、後で別のコンポーネントを追加できる **CommCell®** 構成のインストール方法と使い方について説明します。

- **CommCell® アーキテクチャ概要**
 - CommCell 概要
 - クライアント エージェント
 - Common Technology Engine
 - **CommCell® ソフトウェア デプロイメント**
 - はじめに
 - その他のデプロイメント シナリオ
 - **CommServe® ソフトウェアのインストール**
 - **MediaAgent のインストール - Windows**
 - **Microsoft Windows File System iDataAgent のインストール**
 - **CommCell® Console の使用**
 - CommCell Console の開始
 - CommCell Console コンポーネント
 - **データのバックアップ**
 - バックアップの実行
 - バックアップ履歴の表示
 - データのブラウズおよびリストア
 - **これ以後の操作**
 - バックアップのスケジュール
 - レポートのスケジュール
 - アラートの構成
 - その他の操作
-

CommCell® アーキテクチャ概要

概要

クライアント エージェント

- **iDataAgent**
- アーカイブ管理エージェント
- **Quick Recovery Agent**
- **ContinuousDataReplicator** エージェント

Common Technology Engine

- **CommServe®** サーバー
- **MediaAgent**

CommCell® Console

内容索引作成および検索

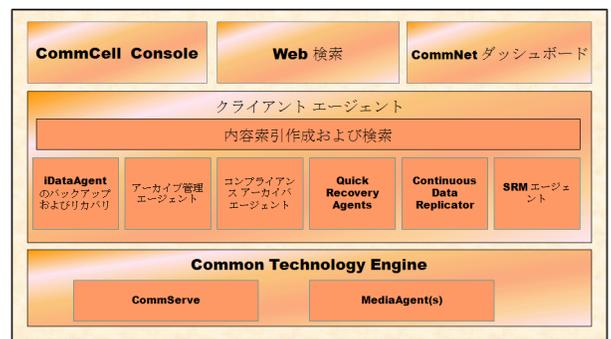
CommCell インストール

概要

本ソフトウェアは、重要なデータの移動や管理を容易にする強力なストレージ管理ツール セットを提供します。これらのツールを使用することによって、社内のコンピュータ システムに関連付けられたデータを格納および取得できます。

システムは統合されたソフトウェア モジュールから構成され、これらのモジュールを組み合わせることで **CommCell®** 構成内でグループ化できます。各 **CommCell** 構成は、次のメイン コンポーネントから構成されています。

- 1 つまたは複数の次のクライアント エージェント：
 - バックアップおよびリストア操作を行う **iDataAgent**
 - アーカイブ管理エージェント (移行アーカイブおよびリカバリ操作を行うエージェント、**Compliance Archiver** エージェントなど)
 - **QR²** ボリュームの作成およびリカバリを行う **Quick Recovery Agent® (QR)** エージェント
 - ソース クライアントから宛先クライアントにデータをレプリケートする **ContinuousDataReplicator**
- 次の要素から構成される **Common Technology Engine (CTE)**:
 - **CommServe®** サーバー
 - 1 つまたは複数の **MediaAgent**
- ローカル ストレージ リソースに関する情報を解析しレポートするための **SRM Server** と **SRM Agent** を含む **Storage Resource Manager (SRM)**
- これらの **CommCell®** 要素は、インストールおよび構成後に 1 つの共通の **CommCell® Console** から制御およびモニタできます。
- 内容索引作成や検索コンポーネントを使用して、**CommCell** 全体のデータ (格納データおよびオンライン データ) をデータ検出やその他の目的のために検索することができます。



クライアント エージェント

クライアント エージェントは、特定のオペレーティング システムまたはアプリケーションのデータを保護およびリカバリするソフトウェア モジュールです。コンピュータ上にあるすべてのタイプのデータを保護するために、複数のエージェントを使用することができます。次の節では、各クライアント エージェントについて簡単に説明します。

iDataAgent

iDataAgent は、データのバックアップおよびリストア時に使用されるソフトウェア モジュールです。システムにはさまざまな

iDataAgent が用意されており、それぞれ異なるタイプのデータを処理するように設計されています。使用するコンピュータに複数のタイプのデータが存在する場合、データ タイプごとに異なる iDataAgent が必要となります。たとえば、Microsoft Exchange Server がインストールされているコンピュータの場合、すべてのデータの安全を確保するには、次の iDataAgent が必要です。

- 1 つの Windows File System iDataAgent (コンピュータのファイル システムのバックアップ用)
- 1 つの Microsoft Exchange Database iDataAgent (データベースのバックアップ用)

この構成の場合、CommCell® Console 上では、クライアント コンピュータに 2 つの iDataAgent が表示されます。

アーカイブ管理エージェント

エージェントには、次の 2 つのタイプがあります。

● Migration Archiver Agents

Migration Archiver Agents は、使用されていないか、または使用頻度の低いデータを定期的にホスト コンピュータから 2 次ストレージに移動するソフトウェア モジュールです。これにより、1 次ストレージのデータ サイズを減らすことができます。システムにはいくつかのエージェントが用意されており、それぞれ異なるタイプのデータを処理するように設計されています。Migration Archiver Agents は、iDataAgent によってバックアップするデータの量を減らすことで、バックアップにかかる時間を短縮します。

● Compliance Archiver エージェント

Compliance Archiver エージェントは、セキュリティおよびコンプライアンス標準を満たすために、長期ストレージ用に設計されたソフトウェア モジュールで、データの索引を作成します。Compliance Archiver エージェントの主な機能は、本番環境以外の場所にデータを保存することです。Compliance Archiver は、データのアーカイブおよび索引作成後、データをソース クライアントから除去します。こうすることによって、大量のデータを格納でき、後で参照することも可能となります。

Quick Recovery® Agents

Quick Recovery® エージェントは、スナップショット技術を使用して、磁気ディスクに Quick Recovery (QR) ボリュームを作成するソフトウェア モジュールです。QR² ボリュームは、数分で簡単にリカバリできます。Quick Recovery Agent は、Microsoft SQL Server、Microsoft Exchange、Oracle などの主要な高度ストレージ アプリケーションと統合でき、データ オブジェクトを正しく同期させ、リカバリを容易にします。Quick Recovery Agent では、iDataAgent による従来のバックアップおよびリストア操作を拡張し、頻繁にデータ イメージを作成でき、必要に応じて、従来の方法よりも短時間でアプリケーションをリカバリできます。これらのイメージを使用して従来のバックアップおよびリストア操作を実行する場合は、iDataAgent を使用します。

ContinuousDataReplicator エージェント

ContinuousDataReplicator (CDR) エージェントは、ソース コンピュータから宛先コンピュータにデータをほぼリアルタイムでレプリケートすることによって、アプリケーション データおよびファイル システムを保護するソフトウェア モジュールです。宛先コンピュータ側で QSnap² サービスにより作成されるスナップショットを使用してリカバリ ポイントを作成すると、高可用性のデータを安全で一貫性のある状態に保つことができます。スナップショットのマウント、共有、またはリカバリには、コピーバックを使用します。さらに、一貫性のあるファイル システム データまたはアプリケーション データのスナップショットからバックアップを作成しておくことによって、特定の時点にリカバリすることもできます。

ストレージ リソース管理 (SRM)

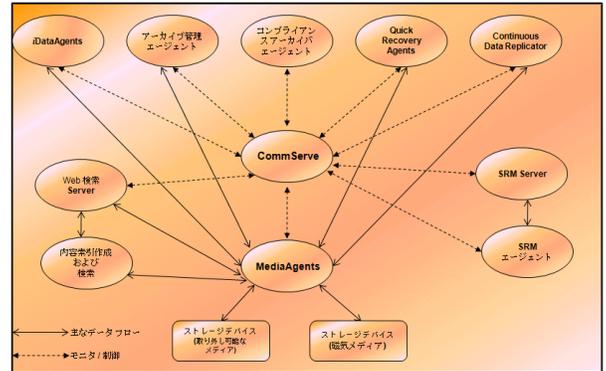
SRM では、ディスク、ファイル システム、ネットワーク共有などの利用可能なストレージ リソースを検出、識別、および追跡し、レポートおよびサマリの形式で詳細な解析結果を提供することができます。SRM ソフトウェアは SRM Server から構成されています。この SRM Server は種々の SRM Agent からデータを取得するレポート エンジンを用意しています。SRM Agent は種々のオペレーティング システムおよびアプリケーションからデータを収集するクライアント エージェントです。

Common Technology Engine

Common Technology Engine は、クライアント エージェントの管理および運用、また CommCell® 構成に関連付けられたストレージ メディアの管理に必要なツールを提供するソフトウェア モジュールから構成されています。次の節では、Common Technology Engine のコンポーネントについて説明します。

CommServe® サーバー

CommServe® サーバーは、CommCell® コンポーネントを互いに連結し、CommCell コンポーネントを調整および管理する役割を果たします。CommServe サーバーは、CommCell 内のすべてのエージェントと通信を行い、データ保護、管理、およびリカバリ操作を開始します。同様に、メディアサブシステムを管理する必要がある場合は、MediaAgent と通信を行います。CommServe サーバーは、CommCell 構成に関連したすべての情報が含まれるデータベースの保守を行います。また、CommCell をコンポーネント運用および管理するためのいくつかのツールを提供します。



MediaAgent

MediaAgent は、クライアント コンピュータとストレージ メディア間のデータ転送を行います。各 MediaAgent は、ストレージ メディアを含む 1 つまたは複数のストレージ デバイスとローカルまたはリモート通信を行います。システムでは、さまざまなストレージ デバイスがサポートされています。

CommCell® Console

グラフィカル ユーザー インターフェイスである CommCell Console を使用して、CommCell 要素を制御および管理できます。CommCell Console は、次の 2 とおりの方法で実行できます。

- スタンドアロン アプリケーションとして実行できます。CommServe® ストレージ マネージャと通信可能な任意のコンピュータに直接インストールできます。
- Java Web Start を使用してリモート Web ベース アプリケーションとして実行できます。これにより、Web ブラウザを使用して CommCell Console にリモート アクセスできます。

内容索引作成および検索

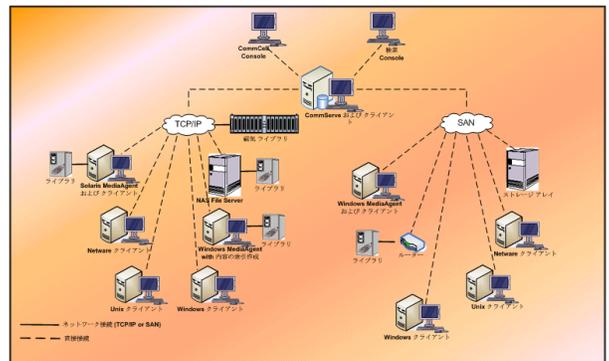
内容索引作成および検索コンポーネントを使用すると、CommCell グループで検索およびデータ検出操作を実行できます。この強力なコンポーネントでは、オンライン データと格納データの両方を検索できます。管理者、コンプライアンス責任者、およびエンドユーザーは、このコンポーネントを使用することによって、CommCell 構成内のさまざまなアプリケーション (File System、Exchange、SharePoint、Lotus Notes など) からデータを検索およびリストアできます。

検索およびリストア操作は、CommCell Console または Web ベース検索コンソールのいずれかから実行することができ、これらのコンソールは堅牢かつ不可侵なセキュリティ モデルにより制御されています。

CommCell インストール

ソフトウェア全体はモジュール化されており、必要に応じて、同じまたは別のコンピュータにインストールすることもできます。CommServe と MediaAgent にそれぞれ専用のコンピュータを用意することもできます。また、CommServe のファイル システム データのバックアップを作成するために、CommServe サーバー コンピュータにクライアント ソフトウェアをインストールすることもできます。さらに、1 台のコンピュータを CommServe、MediaAgent、およびクライアントとして使用することもできます。本ソフトウェアでは、これらいずれの構成方法もサポートされています。

図は、CommCell アーキテクチャの例を示しています。



[トップに戻る](#)

CommCell® ソフトウェア デプロイメント

概要

はじめに

- システム要件を満たす
- CommCell® コンポーネントのインストール
- このガイドの使用方法
- 複数コンポーネントの選択
- 柔軟性およびスケーラビリティ

その他のデプロイメント シナリオ

概要

はじめに

次の節では、CommCell® ソフトウェア デプロイメント プロセスの概要について説明します。

システム要件を満たす

コンポーネントをインストールする前に、製品のリリース ノートと、CommCell® コンポーネントに関するシステム要件およびインストール前要件をよくお読みください。システム要件とインストール前要件には、コンポーネントをインストールするのに必要な基本的な条件が記載されています。リリースノートには、製品の使用前に注意すべき重要事項が記載されています。この情報を得るには、[Books Online](#) を参照してください。

CommCell® コンポーネントのインストール

CommCell® コンポーネントは、次の順序でデプロイメントする必要があります。

1. CommServe® ソフトウェア (詳細な方法については、「[CommServe® ソフトウェアのインストール](#)」を参照)
2. MediaAgent ソフトウェア (詳細な方法については、「[MediaAgent のインストール - Windows](#)」を参照)
3. File System iDataAgent ソフトウェア (Windows File System iDataAgent のインストール方法については、「[Microsoft Windows File System iDataAgent のインストール](#)」を参照。

その他のエージェントのインストール方法については、[Books Online](#) で適切なインストール手順を参照してください。

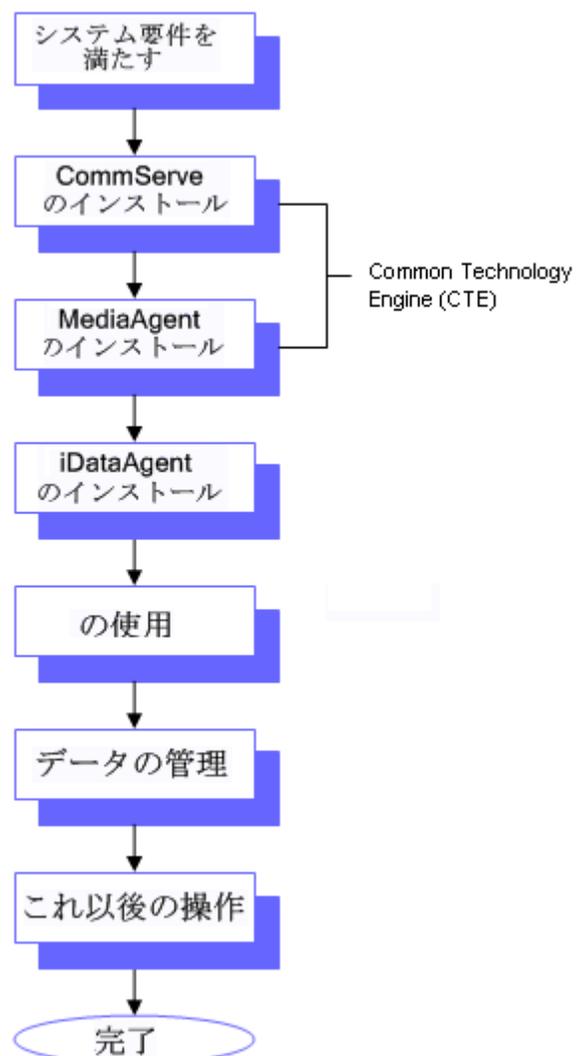
インストール処理では、CommCell® 構成内のすべてのコンポーネントを接続する CommServe ソフトウェアが常に最初にインストールされます。

次に MediaAgent がインストールされ、[ライブラリおよびドライブ構成] ウィンドウでストレージ ライブラリ、ドライブ、メディア、およびコピー マネージャの構成を行います。

最後に、管理するデータが含まれるコンピュータにエージェントがインストールされます。これらのエージェントは最後にインストールされます。このとき、CommServe® ソフトウェアおよび MediaAgent ソフトウェアが事前にインストールされている必要があります。

右のフロー図は、ソフトウェアのデプロイメントに必要な主な手順を示しています。

このガイドの使用方法



CommCell クイック スタート ガイドに記載されている手順は、Windows オペレーティング システムを実行中の単独 (個別) コンピュータへの CommServe® サーバー ソフトウェア、MediaAgent、および File System /DataAgent コンポーネントのインストールについて説明しています。

クライアント コンピュータに複数のコンポーネントをインストールする場合は、インストール手順が異なります。

複数コンポーネントの選択

インストール時に、複数のコンポーネントを選択する場合があります。ソフトウェアの共通パス、およびコンポーネント固有のパラメータを入力する必要があります。これにより、選択されたコンポーネントが正しい順序でインストールされます。たとえば、同じコンピュータを CommServe と MediaAgent の両方として使用する場合は、インストール プログラムは 1 回のセッションに必要なすべてのセットアップ パラメータを要求します。インストールをキャンセルしたり、インストールが失敗した場合は、インストールを再開することができます。インストールを再開するか、またはインストール処理をやり直すかは、ユーザーが選択できます。

柔軟性およびスケーラビリティ

ソフトウェアは多数の構成に対応できる柔軟性を備えているので、データ管理と環境の要件に正確に合わせてデプロイメントできます。たとえば、コンピュータは CommServe® サーバーと MediaAgent の両方として機能することができます。ニーズの増大に応じて、MediaAgent、ライブラリ、およびクライアント コンピュータを追加することができます。

その他のデプロイメント シナリオ

ソフトウェアは、Windows、NetWare、Unix、および Linux コンピュータから構成される異種コンピューティング環境をサポートするので、次のシナリオでは、このような環境へのデプロイメントが可能です。

- クラスタ化環境
- NetWare クライアントと MediaAgent
- Unix クライアントと MediaAgent
- Network Attached Storage (NAS)
- Storage Area Network (SAN)

これらのコンポーネントの詳細については、Books Online を参照してください。

CommServe ソフトウェアのインストール

ソフトウェアのインストールに関するそれぞれの節に移動するには、以下のリンクをクリックします。

- インストール要件
 - インストール チェックリスト
 - 開始する前に
 - インストール手順
 - はじめに
 - インストールするコンポーネントの選択
 - 必要な権限の設定
 - Microsoft SQL Server インスタンスのセットアップ
 - 他のインストール オプションの構成
 - ファイアウォール構成
 - ユーザー名およびパスワードの設定
 - Web ベース管理用に CommCell[®] Console を構成
 - インストール オプションのサマリの確認
 - 自動更新のスケジュール
 - 必要な権限の除去
 - セットアップ完了
 - インストール後の考慮事項
-

インストール要件

CommCell[®] コンポーネントをインストールする場合、必ず CommServe[®] ソフトウェアを最初にインストールします。CommServe サーバーは、すべてのクライアントおよび MediaAgent と通信を行い、CommCell 内の各操作 (バックアップ、リストア、コピー、移行、メディア管理など) を調整します。

ソフトウェアのインストール中、Microsoft SQL Server 2005 データベース インスタンス (Enterprise Edition) が適切なサービスパックと共に自動的にインストールされます。

ソフトウェアをインストールするコンピュータが、「システム要件 - CommServe」で指定されている最小要件を満たしていることを確認してください。

追加のコンポーネントを同時にインストールする場合、各コンポーネントのインストール要件および手順については、該当する手順を参照してください。複数のコンポーネントをインストールする場合、インストール手順の順序が前後することがあります。

ソフトウェアをインストールする前に、以下のインストール要件を確認してください。

一般

- CommServe[®] ソフトウェアは、圧縮済みドライブにインストールしないでください。
- すべてのアプリケーションを閉じ、ウイルス対策、スクリーン セーバー、オペレーティング システム ユーティリティなどの自動的に実行されるすべてのプログラムを無効にします。さまざまなウイルス対策プログラムなどの一部のプログラムは、サービスとして実行される場合があります。開始する前にこのようなサービスを停止および無効にします。インストール後にこれらのサービスを再び有効化することができます。
- CommServe[®] は、Microsoft Exchange Server または Oracle データベースが存在するコンピュータにインストールしないでください。
- お手持ちのソフトウェア インストール ディスクが、インストール先のコンピュータのオペレーティング システムに対応していることを確認します。
ソフトウェアのインストールを開始する前に、最新のソフトウェア インストール ディスクがあることを確認してください。確認できない場合は、ソフトウェア プロバイダにお問い合わせください。

ファイアウォール

- CommServe[®] サーバー、MediaAgent、およびクライアントが双方向ファイアウォールを介して通信している場合：
 - ポート 8400 で、ファイアウォールを介した通信が許可されていることを確認します。

○ また、双方向ポート範囲 (連続または個別) が、ファイアウォールを介した接続として許可されている必要があります。

ポート範囲の構成については、「[双方向ファイアウォールのポート要件](#)」を参照してください。

● **CommServe** サーバー、**MediaAgent**、およびクライアントが一方向ファイアウォールを介して通信している場合：

○ ソフトウェアが使用する発信ポートの範囲 (連続または個別) を識別します。

ポート範囲の構成については、「[一方向ファイアウォールのポート要件](#)」を参照してください。

ネットワーク

- **CommServe**® コンピュータに複数のネットワーク インターフェイス カードおよび IP アドレスを使用している場合は、すべてのネットワーク通信パスが機能していることを確認してください。また、**CommServe** のインストール時に使用されるネットワーク インターフェイスが最初にネットワークにバインドされるように設定されていることを確認してください。ネットワーク インターフェイス カードの詳細については、「[ネットワーク要件](#)」を参照してください。

ターミナル サービス

- ターミナル サービスを使用して **CommCell**® コンポーネントをインストールする場合、インストーラまでの **UNC** パスを指定する必要があります。**UNC** パスを使用して **CommServe** ソフトウェアをインストールする場合、**SQL** がインストール済みで、かつデータベース インスタンスが構成済みである必要があります。

インストール チェックリスト

ソフトウェアをインストールする前に、次の情報を収集します。情報を記録するために提供された領域を使用し、この情報を障害復旧バインダで保持します。

1. インストール フォルダの場所: _____

詳細については、「[インストールするコンポーネントの選択](#)」を参照してください。

2. **SQL Server** システム管理者パスワード: _____

詳細については、「[Microsoft SQL Server インスタンスのセットアップ](#)」を参照してください。

3. データベース宛先フォルダの場所: _____

詳細については、「[他のインストール オプションの構成](#)」を参照してください。

4. **CommServe** ホスト名または **CommServe IP** アドレス: _____

詳細については、「[他のインストール オプションの構成](#)」を参照してください。

5. **CommServe** 障害復旧パス: _____

詳細については、「[他のインストール オプションの構成](#)」を参照してください。

6. **CommServe** サーバーおよびクライアント コンピュータがファイアウォールを越えて通信する場合：

ファイアウォール ポート: _____

ファイアウォールの反対側のコンピュータのホスト名/IP アドレス、および対応する **GxCVD** ポート番号: _____

キープ アライブ間隔 (分): _____

発信トンネル接続のホスト名: _____

トンネル初期化間隔 (秒): _____

詳細については、「[ファイアウォール構成](#)」を参照してください。

7. メディア パスワード: _____

詳細については、「[ユーザー名およびパスワードの設定](#)」を参照してください。

8. Web URL: _____

詳細については、「Web ベース管理用に CommCell® Console を構成」を参照してください。

9. 自動更新の FTP ダウンロードの時間および頻度: _____

自動更新のインストールの時間および頻度: _____

詳細については、「自動更新のスケジュール」を参照してください。

開始する前に

- ローカル管理者、またはコンピュータの Administrators グループのメンバとしてクライアントにログオンします。

インストール手順

はじめに

1. Windows プラットフォームのソフトウェア インストール ディスクをディスク ドライブに挿入します。
数秒後に、インストール プログラムが開始されます。
インストール プログラムが自動的に開始されない場合：
 - Windows タスク バーの [スタート] ボタンをクリックし、[ファイル名を指定して実行] をクリックします。
 - インストール ディスク ドライブにブラウズし、Setup.exe を選択し、[開く] をクリックして、[OK] をクリックします。
2. この画面では、インストール時に使用する言語を選択します。下矢印をクリックし、プルダウン リストから目的の言語を選択し、[次] をクリックして続行します。
3. ソフトウェアをインストールするオプションを選択します。
ノート
 - この画面は、コンピュータ上で bAllow32BitInstallOn64Bit レジストリ キーが作成され、有効化されている場合にのみ表示されます。
4. ソフトウェアをコンピュータにインストールするオプションを選択します。
ノート
 - 画面に表示されるオプションは、ソフトウェアがインストールされるコンピュータによって異なります。
5. ようこそ画面を読みます。
他のアプリケーションが実行されていない場合は、[次] をクリックして続行します。
6. ウイルス検知ソフトウェアの警告を読みます。
ウイルス検知ソフトウェアが無効になっている場合は、[OK] をクリックして続行します。

7. ライセンス契約を読み、[ライセンス契約の条項に同意する]を選択します。

[次] をクリックして続行します。

インストールするコンポーネントの選択

8. インストールするコンポーネントを選択します。

ノート

- 表示される画面は、例とは異なる場合があります。
- 既にインストールされているか、またはインストールできないコンポーネントは、淡色表示 (選択不可) となります。コンポーネント上をポイントして、詳細情報を表示します。
- [使用中の特殊なレジストリ キー] フィールドは、コンピュータで GalaxyInstallerFlags レジストリ キーが有効化済みである場合に有効化されます。このフィールド上をポイントして、設定されているキーやその値を確認します。詳細については、「[レジストリ キー](#)」を参照してください。

[次] をクリックして続行します。

CommServe ソフトウェアをインストールするには、CommServe Modules フォルダを展開し、以下を選択します。

- CommServe

デフォルトでは、CommCell Console が選択されます。CommCell Console for JAVA は、CommCell Console フォルダ内にあります。



9. [はい] をクリックして、Microsoft .NET Framework パッケージをインストールします。

ノート

- Microsoft .NET Framework パッケージをインストールする場合は、画面に表示されるプロンプトに従います。
- Microsoft .NET Framework のサービス パックをインストールするように求められた場合は、[はい] をクリックします。
- このプロンプトは、Microsoft .NET Framework がインストールされていない場合にのみ表示されます。
- Microsoft .NET Framework がインストールされると、このソフトウェアにより Microsoft Visual J# 2.0 パッケージが自動的にインストールされます。

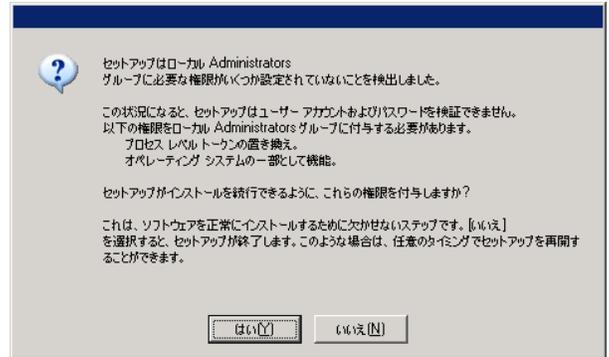


必要な権限の設定

10. [はい] をクリックして、ローカル Administrators グループに必要な権限を設定します。

ノート

- このオプションは、ソフトウェアのインストールに使用された Windows ユーザー アカウントが、必要な管理者権限を持っていない場合にのみ表示されます (オペレーティング システムが新たにインストールされた場合など)。
- [はい] をクリックすると、インストール プログラムによって、必要な権限がアカウントに自動的に割り当てられます。インストールを続行するために、ログオフして再度ログオンすることを求められる場合があります。
- [いいえ] を選択した場合は、インストールが強制終了されず。
- インストールの最後に、これらの権限を失効するかどうかを決定するよう求められます。



インストール プログラムにより、以下の必須のオペレーティング システム権限が現在の Windows ユーザー アカウントにあるかどうかチェックされます。

- クォータを増加させる権限 (Windows Server 2003 の場合、プロセスのメモリ クォータの増加)
- オペレーティング システムの一部として機能する権限
- プロセス レベル トークンを置き換える権限

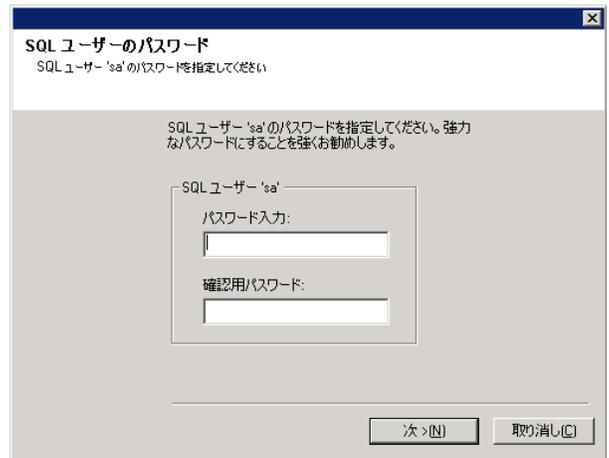
Microsoft SQL Server インスタンスのセットアップ

11. SQL Server システム管理者パスワードを指定します。

ノート

- このパスワードは、インストール中に SQL により作成される管理者アカウントのパスワードになります。

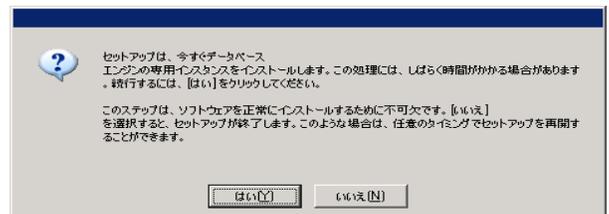
[次] をクリックして続行します。



12. [はい] をクリックして、CommServe サーバー専用の Microsoft SQL Server インスタンスをセットアップします。

ノート

- このプロンプトは、SQL Server データベース インスタンスがこのコンピュータにインストールされていない場合にのみ表示されます。
- [いいえ] をクリックすると、インストール プログラムが終了します。



13. データベース エンジンのインストール パスを入力します。

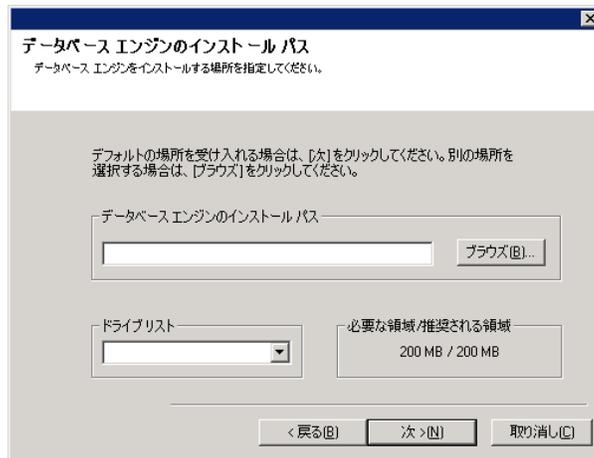
ノート

- この場所に Microsoft SQL Server のシステム データベースをセットアップします。
- CommServe コンピュータに VSS を使用したバックアップを実行する場合、CommServe データベースをシステム ドライブにインストールしないことをお勧めします。VSS リストア中、システム状態を正常にリストアできなくなることがあります。

[ブラウズ] をクリックして、ディレクトリを変更します。

[次] をクリックして続行します。

インストール プログラムによって、データベース インスタンスがインストールされます。



14. MSSQL Server インストール パスを入力します。

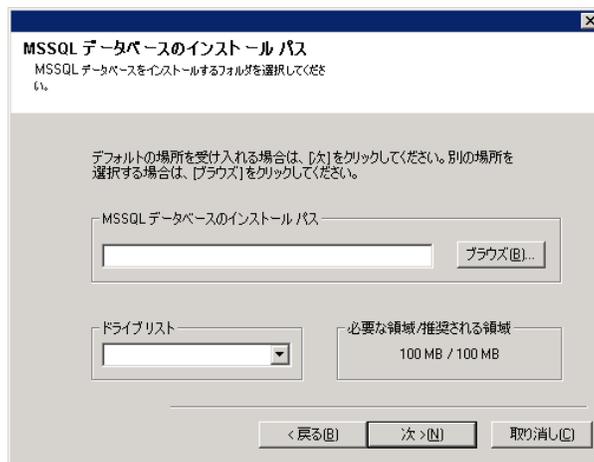
ノート

- これは、Microsoft SQL Server をインストールする場所です。

[ブラウズ] をクリックして、ディレクトリを変更します。

[次] をクリックして続行します。

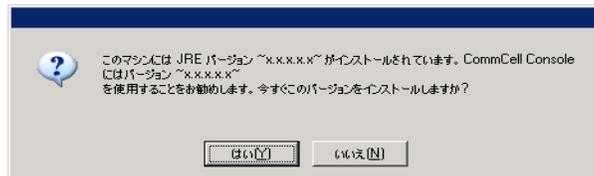
このステップは完了まで数分かかる場合があります。



15. Java ランタイム環境 (JRE) をインストールする場合は [はい] をクリックし、コンピュータに既にインストールされている JRE バージョンを使用する場合は [いいえ] をクリックします。

ノート

- このプロンプトは、インストール プログラムによりインストールされる JRE バージョンより以前の JRE バージョンがコンピュータで実行されているか、または有効な JRE バージョンが存在しない場合にのみ表示されます。JRE バージョンの詳細については、「システム要件 - CommServe」を参照してください。



他のインストール オプションの構成

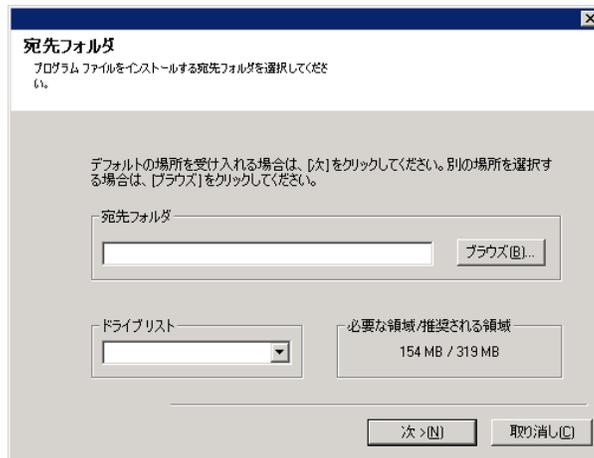
16. ソフトウェアをインストールする場所を指定します。

ノート

- マップされたネットワーク ドライブにソフトウェアをインストールしないでください。
- 宛先パスを指定するときは、次の文字を使用しないでください。
/:*?"<>|
英数字のみを使用することをお勧めします。
- 他のコンポーネントをコンピュータにインストールする場合は、選択されたインストール ディレクトリがそのソフトウェアについても自動的に使用されます。
- コンポーネントが既にインストールされている場合、この画面は、インストーラが以前使用されたのと同じインストール場所を使用できるときには表示されません。
- **Windows File System iDataAgent** に対応する **スナップバックアップ** を使用する場合、ファイラ ボリュームではない非システム ドライブにエージェントをインストールする必要があります。

[ブラウズ] をクリックして、ディレクトリを変更します。

[次] をクリックして続行します。



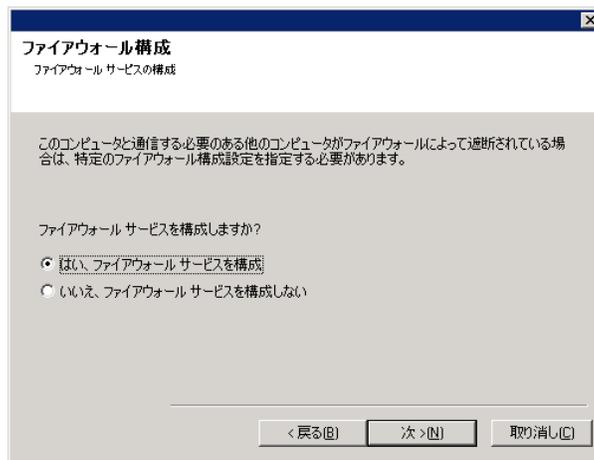
ファイアウォール構成

17. 以下から選択してください。

- クライアントがファイアウォールを越えて **CommServe** サーバーや **MediaAgent** と通信する場合は、[はい、ファイアウォール サービスを構成] を選択し、[次] をクリックして続行します。次のステップに進みます。
- ファイアウォール構成が必要ない場合は、[いいえ、ファイアウォール サービスを構成しない] をクリックし、[次] をクリックして続行します。次のセクションに進みます。

ノート

- **Windows 2008** や **Windows Vista** などのオペレーティングシステムには、複数のプロファイルが存在する場合があります。[いいえ] を選択してファイアウォール サービスを構成する場合は、プロファイル内でファイアウォール設定が有効化されていないことを確認してください。
- プロファイル内にファイアウォール設定が存在することをシステムが検出した場合、以下から選択する必要があります。
 - すべてのプロファイルに対してファイアウォールを無効化します: このオプションを選択した場合は注意してください。すべてのプロファイルでファイアウォール設定が無効化されます。この場合はシステムの再起動が必要です。再起動後、インストールは自動的に再開します。
 - ファイアウォールは無効です: ファイアウォール設定で **CommServe** コンピュータとの通信が許可されている場合は、このオプションを選択してください。ファイアウォール サービスを構成するには [戻る] をクリックします。



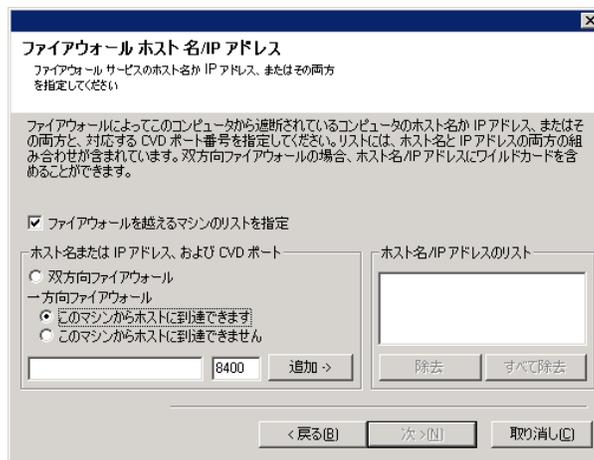
18. [ファイアウォールを越えるマシンのリストを指定] オプションをクリックし、ファイアウォールによってこのコンピュータから遮断されたホストのリストを指定します。ファイアウォールが双方向通信を許可しているか (ポート範囲を制限して) または一方方向通信 (リモート ホストのみがこのコンピュータに接続可能、またはその逆) を許可しているかを、必ず正確に説明します。

着信接続を許可するすべての一方方向ファイアウォール、およびポート フィルタリングの追加なしに発信接続を許可するその一方方向ファイアウォールについては、このステップをスキップします。

[次] をクリックして続行します。

ノート

- 以下を検討します。
 - **CommServe** サーバーの場合、このリストには、ファイアウォールの反対側のすべての **MediaAgent** およびクライアントが含まれている必要があります。
 - **MediaAgent/クライアント** の場合、このリストには、**CommServe** コンピュータとともに、ファイアウォールの反対側にあり通信が確立されるその他のすべてのクライアント/**MediaAgent** が含まれている必要があります。
- 構成するファイアウォールの反対側にあるマシンごとに、使用している環境のファイアウォール設定に基づいてファイアウォール構成タイプを選択します。以下のオプションから選択します。
 - 双方向ポートとして任意のポートを開ける場合は、[双方向ファイアウォール] をクリックします。
 - ファイアウォールの安全な側にあるマシン上で [一方方向ファイアウォール: このマシンからホストに到達できます] をクリックします。
 - ファイアウォールのパブリック/DMZ 側にあるマシン上で [一方方向ファイアウォール: このマシンからホストに到達できません] をクリックします。
- クラスタ環境のコンピュータと通信する場合は、クラスタ内のすべての物理ノードのホスト名/IP アドレス (**CommCell** コンポーネントがインストールされていない場合でも)、および **CommCell** コンポーネントがインストールされているすべての仮想ノードを必ず追加します。
- ホスト名またはホスト名の IP アドレスおよび GxCVD ポート番号を入力し、[追加] をクリックして、ホスト名/IP アドレス リストに追加します。



19. [限定開放ポートのリストを指定] オプションをクリックし、ポート範囲を指定します。ポートの開始範囲と終了範囲を追加し、[追加] をクリックして [開いているポートのリスト] に追加します。必要に応じて繰り返します。

このコンピュータを他のコンピュータと分離しているファイアウォールは着信接続を許可しているが、限られた範囲のポートでしか着信接続の確立が不可能である場合、ここで適切なポート範囲を構成します。その他のすべてのシナリオについては、このステップをスキップします。

ホスト名とポート番号を指定しない場合、ファイアウォールサービスは構成されません。

ノート

- 双方向ファイアウォールの場合は、通常、開いているポートをすべてのコンピュータに指定する必要があります。一方向ファイアウォールでは、ポートが限られた方向に開いている場合、開いている側のコンピュータにポートを指定する必要があります。一方向ファイアウォールで、完全に閉じられているコンピュータについて、ポート範囲の指定は必要はありません。たとえば、ワークステーションのバックアップ エージェントでクライアントとして構成されたラップトップなどがそれに相当します。
- クラスタ環境では、ここで指定したファイアウォール ポートが、すべての物理ノードおよび仮想ノードで通信用に開かれていることを確認してください。

[次] をクリックして続行します。

ファイアウォール ポート

ファイアウォール サービスの開いているファイアウォール ポートを指定してください。

限定されたポート セットでのみ、このマシンに到達可能である場合、ファイアウォールで開放されているポート範囲を指定する必要があります。ポート 8400 または 8402 については、これらのポートをファイアウォールで開放する必要があったとしても、ポート範囲に指定しないでください。

開いているポート範囲を指定します

開いているポート範囲

開始 [] - 終了 [] [追加 >]

[除去]

[すべて除去]

< 戻る(B) [次 > (N)] [取り消し(C)]

20. 必要に応じて、キープ アライブ間隔を変更します。

[次] をクリックして続行します。

ファイアウォール キープ アライブ間隔

ファイアウォール キープ アライブ間隔を指定してください。

数多くのファイアウォールでは、ネットワーク接続は一定時間アイドル状態が継続すると切断されます。一部のソフトウェア サービスは、接続を継続する必要があります。ソフトウェアは、定期的にキープ アライブ パケットを送信して、このような接続をアクティブなままにしておきます。

アイドル状態の接続が閉じられるまでの正確な時間については、ファイアウォールのドキュメントを参照するか、またはネットワーク管理者にお問い合わせください。(切断される時間)

切り取り時間よりも 1 分以上長いキープ アライブ間隔を指定してください。

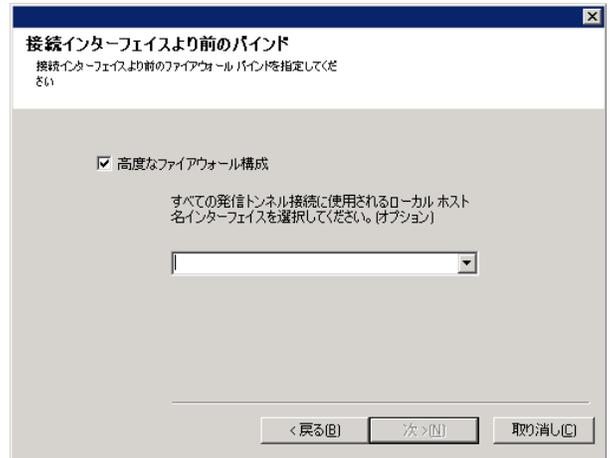
キープ アライブ間隔:

[5] 分

< 戻る(B) [次 > (N)] [取り消し(C)]

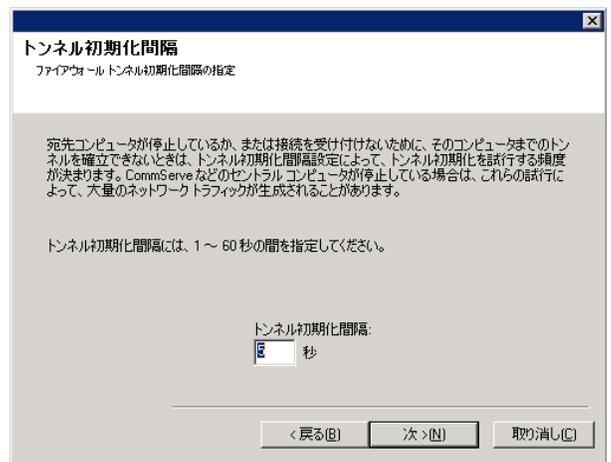
21. 必要に応じて、[高度なファイアウォール構成] を選択し、ファイアウォール経由の発信トンネル接続に使用するローカル ホスト名インターフェイスを指定します。指定しない場合、インターフェイスおよびポートは自動的に選択されます。

[次] をクリックして続行します。



22. 必要に応じて、トンネル初期化間隔を変更します。

[次] をクリックして続行します。



ファイアウォール構成に関連した上記のプロントのいずれかが表示されない場合は、このコンピュータで操作を実行する前に、ファイアウォール構成ウィザードを使用してファイアウォールを経由する通信を構成してください（ファイアウォール構成ウィザードを使用した構成手順については、「[Windows コンピュータ上でのファイアウォール設定の構成または修正](#)」を参照）。

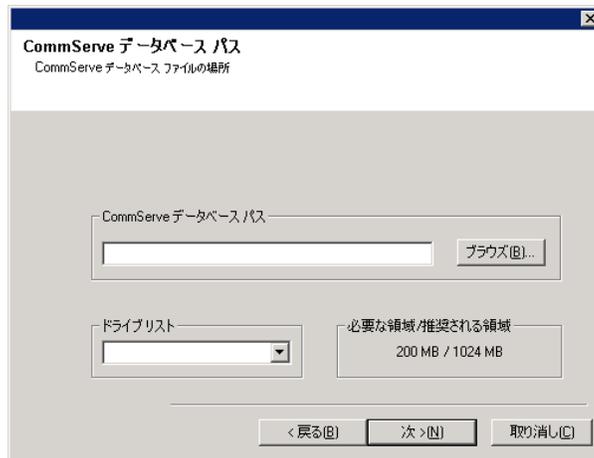
23. CommServe データベースの場所を指定します。

ノート

- マップされたネットワーク ドライブを指定しないでください。
- デフォルトの場所を指定するか、ローカル ディスク ドライブの別の場所を選択できます。ただし、ドライブには **1 GB** 以上の空き領域が必要です。
- **FAT** ドライブ上のディレクトリ ファイル パスを選択しないでください。**FAT** ドライブをこのデータベースの場所として選択することはできません。**FAT** ドライブでは、データベースのスナップショットの作成時に一時スパーズ ファイルを生成することができないため、データを検証することができません。
- デフォルトのメタデータ データベース ディレクトリのディスク領域が少ない場合は、他のアプリケーションに関連付けられていないパスを指定してください。

[ブラウズ] をクリックして、ディレクトリを変更します。

[次] をクリックして続行します。



24. "CommServe クライアント名" および "CommServe ホスト名" を入力します。

ノート

- **CommServe** クライアント名は、コンピュータの名前です。このフィールドには値が自動的に移入されます。
- **CommServe** ホスト名は、**CommServe** コンピュータの TCP/IP ネットワーク インターフェイス名です。このフィールドには値が自動的に移入されます。
- **CommServe** クライアント名または **CommServe** ホスト名に以下の文字は使用しないでください。
\\`~!@#\$%^&*()+=<>/?,[\]{:;'"

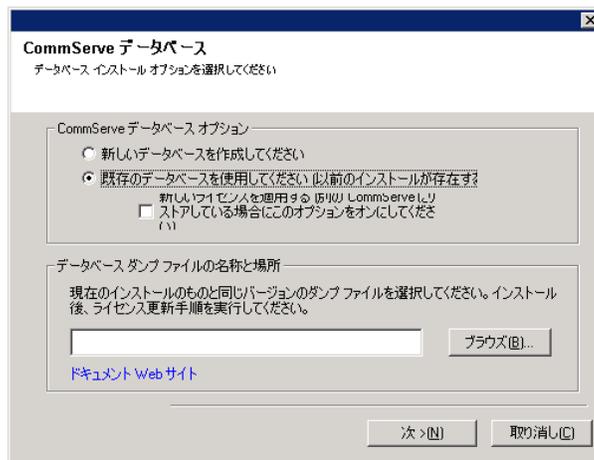
[次] をクリックして続行します。



25. [新しいデータベースを作成してください] オプションを選択し、[次] をクリックして続行します。

ノート

- 表示される画面は、例とは異なる場合があります。

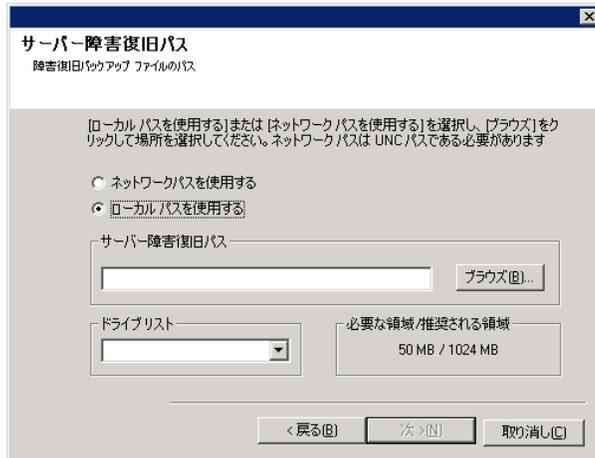


26. 障害復旧バックアップ ファイルを保存するネットワークまたはローカル パスを入力します。

ノート

- クラスタの場合は、共有ドライブを指定してください。
- [ネットワーク パスを使用する] を選択した場合は、[ネットワーク共有ユーザー名] および [ネットワーク共有パスワード] を必ず入力してください。
 - [ネットワーク共有ユーザー名] には、障害復旧バックアップの宛先パスに対する管理権限を持つユーザーの「ドメイン\ユーザー名」を入力します。
 - [ネットワーク共有パスワード] には、ネットワーク共有ユーザー名のパスワードを入力します。

[次] をクリックして続行します。



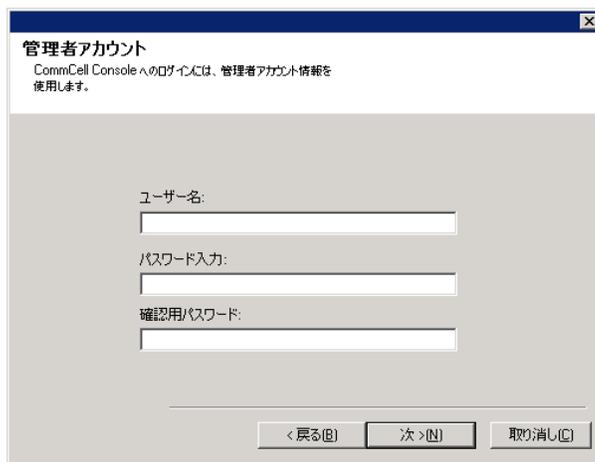
ユーザー名およびパスワードの設定

27. "CommCell ユーザー名" および "CommCell パスワード" を入力します。

ノート

- CommCell ユーザー名およびパスワードは、管理者ユーザーが CommCell Console にログオンするときに使用します。このユーザーは、インストール中に自動的に作成されます。デフォルトでは、すべての機能を実行するのに必要な権限がこのユーザーに付与されます。ソフトウェアのインストール後、これと同じまたはこれより低いセキュリティ権限を持つ CommCell ユーザーを追加できます。

[次] をクリックして続行します。

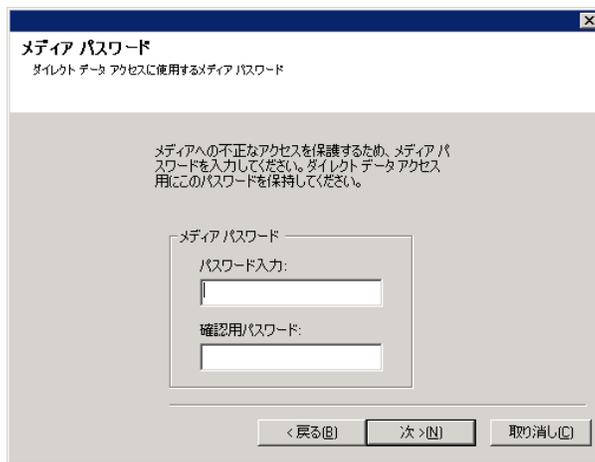


28. [メディア パスワード] を入力し、正しいことを確認します。

ノート

- このパスワードは、システムで使用されるメディアを不正なデータ アクセスから保護するために使用されます。
- パスワードでメディアを保護する場合は、このパスワードを必ず記録しておいてください。障害復旧が必要な場合に、バックアップ メディアから直接バックアップ データを読み取る (Media Explorer などを使用して) 必要が生じる場合があります。メディアに直接アクセスするときに、このパスワードが必要になります。

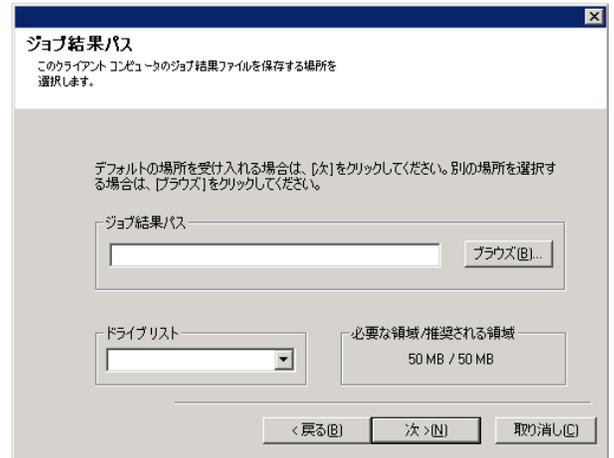
[次] をクリックして続行します。



29. 以下を指定し、[次]をクリックして続行します。
- クライアントのジョブ結果ディレクトリの場所を入力するか、または [ブラウズ] をクリックします。

ノート

- ジョブ結果ディレクトリは、エージェントがクライアントのバックアップおよびリストア ジョブ結果を保存するのに使用します。



Web ベース管理用に CommCell® Console を構成

30. [はい] をクリックして CommCell Console を Web アプリケーション用に構成するか、[いいえ] をクリックして CommCell Console を Web アプリケーション用に構成せずにインストール手順を続行します。

ノート

- Web アプリケーション用に構成するには、Internet Information Server (IIS) がこのコンピュータにインストールされている必要があります。
- Web アプリケーション用にコンピュータを構成すると、以下の操作を実行できます。
 - リモート コンピュータから Web ブラウザを使用して CommCell Console および Books Online にアクセスする。
 - CommCell レポートを Web ブラウザで表示する。
 - CommCell Console のヘルプ ボタン (? が付いているアイコン) をクリックして Books Online にアクセスする。

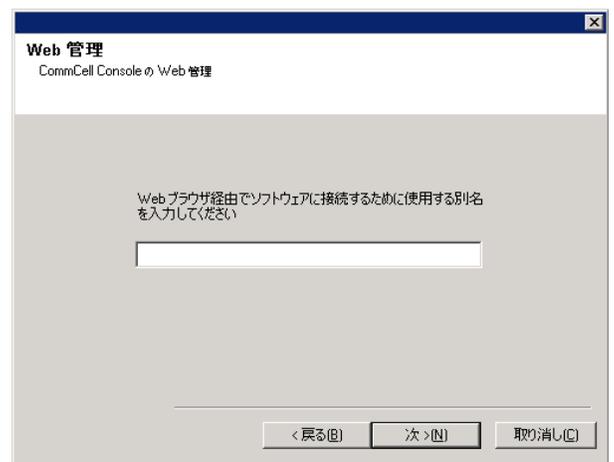


31. CommCell Console にアクセスするとき使用する Web 別名を入力 (またはデフォルトの別名を使用) します。

ノート

- 別名が既に存在する場合、別名が既に使用されていることを示すメッセージが表示されます。[はい] をクリックして別名を上書きし、[OK] をクリックします。

[次] をクリックして続行します。

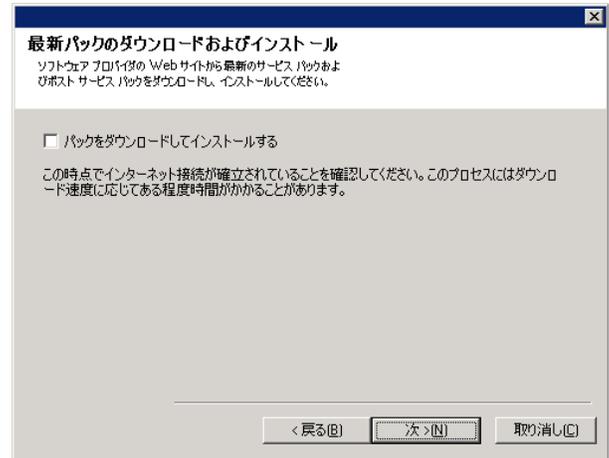


32. [パックをダウンロードしてインストールする] を選択して、最新のサービス パックおよびポスト パックをソフトウェア プロバイダからダウンロードしてインストールします。

ノート

- 更新をダウンロードするには、インターネット接続が必要です。
- このステップは、最初のインスタンスにインストールする場合に適用されます。
- 更新は、以下のディレクトリにダウンロードされます。
<software installation>/Base/Temp/DownloadedPacks。
これらは、サイレントに開始され、最初のインスタンスに自動的にインストールされます。

[次] をクリックして続行します。



インストール オプションのサマリの確認

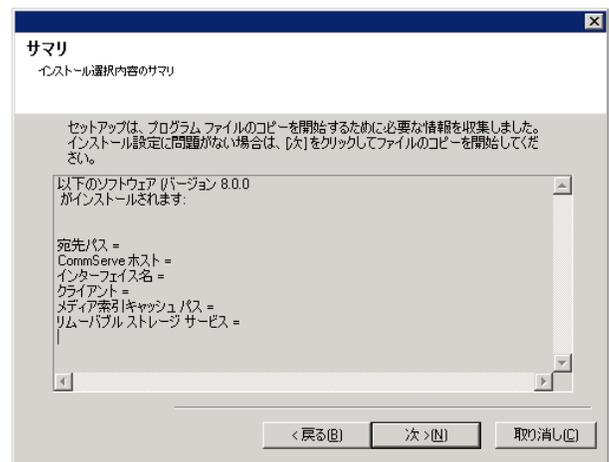
33. 選択されたオプションのサマ리를確認します。

ノート

- 画面の [サマリ] には、インストールすることを選択したコンポーネントが表示されます。この表示は、例とは異なる場合があります。

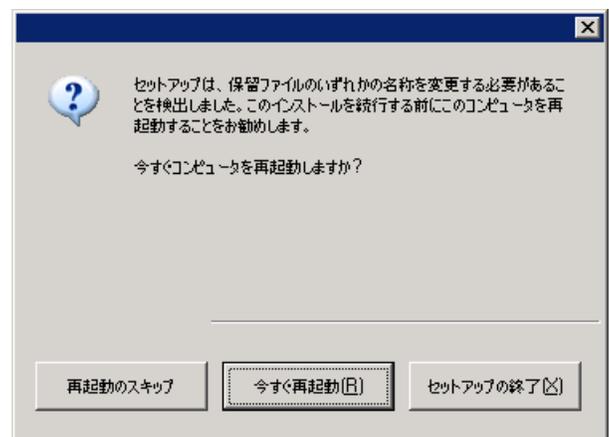
[次] をクリックして続行するか、または [戻る] をクリックしてオプションを変更します。

これで、インストール プログラムによって、コンピュータへのソフトウェアのコピーが開始されます。このステップは完了まで数分かかる場合があります。



34. システムの再起動メッセージが表示される場合があります。その場合は、以下のいずれかを選択します。

- [再起動のスキップ]
このオプションは、他のアプリケーションに属しており、置換が必要なファイルをインストール プログラムが検出すると表示されます。これらのファイルはこのインストールでは重要でないため、再起動をスキップしてインストールを続行したり、コンピュータを後で再起動したりできます。
- 今すぐ再起動
[再起動のスキップ] オプションなしでこのオプションが表示される場合は、インストール プログラムによって、ソフトウェアに必要であり、現在使用中で置換する必要のあるファイルが検出されたことを示します。[今すぐ再起動] が [再起動のスキップ] オプションなしで表示された場合は、この時点でコンピュータを再起動します。再起動後にインストールプログラムが自動的に続行されます。
- [セットアップの終了]
インストール プログラムを終了する場合は、[セットアップの終了] をクリックします。



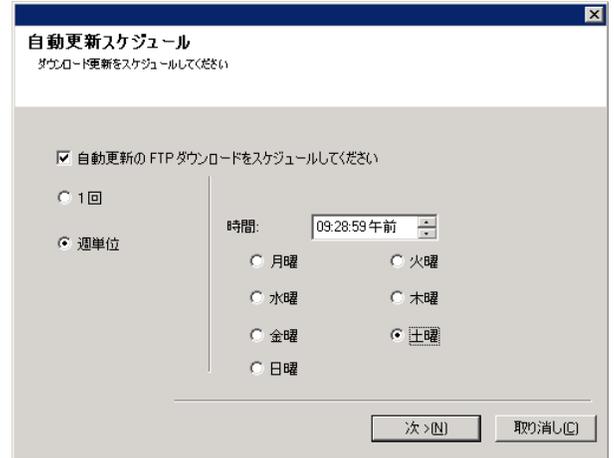
自動更新のスケジュール

35. 必要に応じて、ソフトウェア更新の自動 FTP ダウンロードをスケジュールする場合にはこのオプションを選択します。

ノート

- 自動更新のスケジュールを使用すると、ソフトウェア更新を 1 回または週単位で自動的にダウンロードできます。
- このオプションを選択しない場合は、これらの更新を後で **CommCell Console** からスケジュールすることができます。

[次] をクリックして続行します。



36. 必要に応じて、FTP サイトからダウンロードした更新ファイルを保存する場所のパスを指定します。

ノート

- このプロンプトは、[自動更新の FTP ダウンロードをスケジュールする] オプションが有効になっている場合にのみ表示されます。

[次] をクリックして続行します。

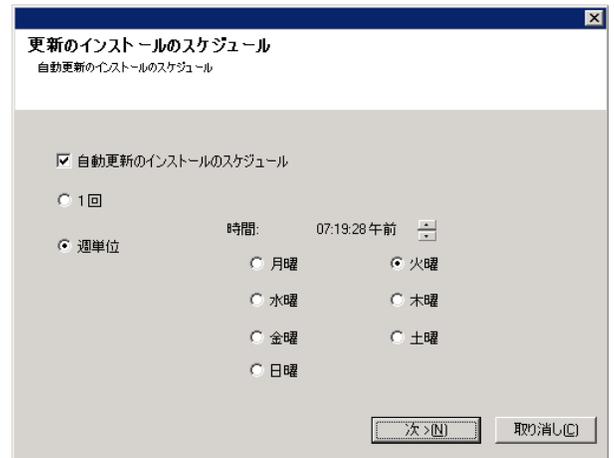


37. 必要に応じて、ソフトウェア更新の自動インストールをスケジュールするためにこのオプションを選択します。

ノート

- "更新のインストールのスケジュール" を使用すると、必要なソフトウェア更新をコンピュータに 1 回または週単位で自動的にインストールできます。このオプションを選択しない場合は、これらの更新を後で **CommCell Console** からスケジュールすることができます。
- 競合を回避するために、ソフトウェア更新の自動インストールが、ソフトウェア更新の自動 FTP ダウンロードと同時に発生するようにスケジュールしないでください。
- サービスを再開する前に、コンピュータの再起動を求められる場合があります。
- コンポーネントが既にインストールされている場合この画面は表示されず、代わりに、インストーラは以前指定したのと同じオプションを使用します。

[次] をクリックして続行します。

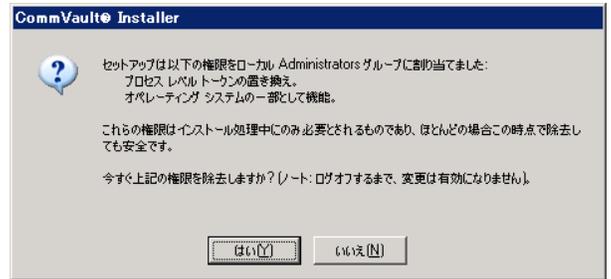


必要な権限の除去

38. [はい] をクリックして、インストール プログラムによって割り当てられた権限を除去します。除去しない場合は、[いいえ] をクリックします。

ノート

- このオプションは、インストール時に権限を割り当てるように求められた場合にのみ表示されます。



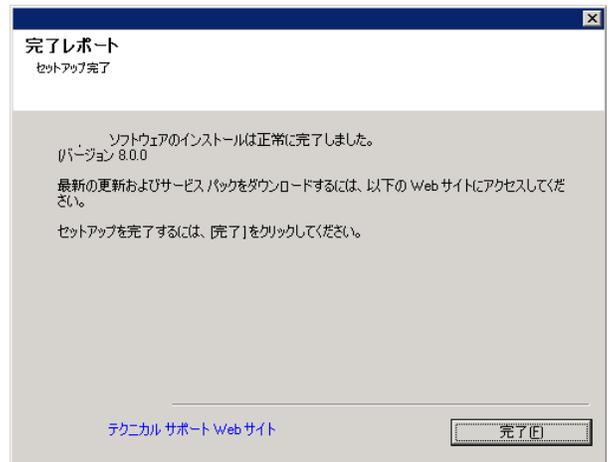
セットアップ完了

39. セットアップ プログラムによって、正常にインストールされたコンポーネントが表示されます。

ノート

- 画面上に表示された "セットアップ完了" メッセージには、インストールしたコンポーネントが表示されます。この表示は、例とは異なる場合があります。
- **CommCell Console** を開いたままエージェントをインストールした場合、新しいエージェントを確認するには、**CommCell Console** をリフレッシュ (F5) する必要があります。
- [今すぐ再起動] ボタンが表示された場合は、コンピュータで他の操作を実行する前にコンピュータを再起動してください。

[完了] をクリックして、インストール プログラムを閉じます。
これでインストールは完了です。



インストール後の考慮事項

一般

- 永久ライセンスを所有している場合は、**CommCell Console** を開いてライセンスを適用してください。ステップ バイ ステップの指示については、「[ライセンス更新](#)」を参照してください。
- このソフトウェアのリリース後に発表された、リリース後更新やサービス パックをインストールします。または、[自動更新] を有効にして、**CommCell**® コンソールの更新をすばやく簡単にインストールすることもできます。
- **CommServe**® または **MediaAgent** ソフトウェアをインストールすると、ホスト コンピュータの **CommCell** ブラウザにクライアント コンピュータとして表示されます。**CommCell Console** の **CommServe** または **MediaAgent** クライアント コンピュータの前にあるアラート アイコンは、エージェント ソフトウェアが、**CommCell** のクライアントとして使用されるためにコンピュータ上にインストールされている必要があることを示しています。

データベース エンジン

- **CommServe**® のインストール後、データベース インスタンスに以下の SQL サーバー設定を行う必要があります。
[メモリ] タブで動的に構成された [最大] メモリが、**CommServe** マシンで使用可能な物理メモリの 50% である必要があります。
[メモリ] タブは、データベース インスタンスの [プロパティ] 画面内にあり、**SQL Enterprise Manager** からアクセスできます。

CommCell Console

- Windows 2000 コンピュータで **CommCell Console** をリモート Web ベース アプリケーションとして実行する場合、リモート コンピュータから **CommCell Console** を起動できるようにするには、コンピュータ上で IIS サービスを手動で再起動する必要があります。

MediaAgent のインストール - Windows

ソフトウェアのインストールに関するそれぞれの節に移動するには、以下のリンクをクリックします。

- [インストール要件](#)
 - [インストール チェックリスト](#)
 - [開始する前に](#)
 - [インストール手順](#)
 - [はじめに](#)
 - [インストールするコンポーネントの選択](#)
 - [ファイアウォール構成](#)
 - [他のインストール オプションの構成](#)
 - [索引キャッシュ](#)
 - [クライアント グループの選択](#)
 - [インストール オプションのサマリの確認](#)
 - [自動更新のスケジュール](#)
 - [残りのクラスタ ノードのインストール](#)
 - [セットアップ完了](#)
 - [インストール後の考慮事項](#)
-

インストール要件

Windows MediaAgent をインストールするコンピュータは、「[システム要件 - MediaAgent](#)」で指定されている最小要件を満たしている必要があります。

以下の節では、Windows MediaAgent のインストールに関係した手順について説明します。複数のコンポーネントを同時にインストールする場合、各コンポーネントのインストール要件および手順については、該当する手順を参照してください。

ソフトウェアをインストールする前に、以下のインストール要件を確認してください。

一般

- MediaAgent をインストールするには、CommServe[®] ソフトウェアが既にインストールされている必要があります。MediaAgent をインストールする前に、CommServe[®] ソフトウェアが実行中である (ただし、同じコンピュータ上である必要はない) ことも確認してください。
- 本バージョンのソフトウェアは、CommServe サーバーのバージョンが 8.0.0 である CommCell にインストールします。
- CommServe で MediaAgent のライセンスが有効であることを確認します。また、NDMP リモート サーバーをインストールする場合は、該当するライセンスがあることも確認します。
- MediaAgent は、圧縮済みドライブにインストールしないでください。
- すべてのアプリケーションを閉じ、ウイルス対策、スクリーン セーバー、オペレーティング システム ユーティリティなどの自動的に実行されるすべてのプログラムを無効にします。さまざまなウイルス対策プログラムなどの一部のプログラムは、サービスとして実行される場合があります。開始する前にこのようなサービスを停止および無効にします。インストール後にこれらのサービスを再び有効化することができます。
- CommVault Communications Service (GxCVD) を実行するアカウントには、バックアップが実行されるドライブにあるすべてのファイルおよびフォルダに対する完全な権限が必要です。デフォルトでは、iDataAgent により、クライアント上のすべてのオブジェクトに対するアクセス権限を持つシステム アカウントが使用されます。
- お手持ちのソフトウェア インストール ディスクが、インストール先のコンピュータのオペレーティング システムに対応していることを確認します。

ソフトウェアのインストールを開始する前に、最新のソフトウェア インストール ディスクがあることを確認してください。確認できない場合は、ソフトウェア プロバイダにお問い合わせください。

ネットワーク

- MediaAgent コンピュータに複数のネットワーク インターフェイス カードおよび IP アドレスを使用している場合は、すべてのネットワーク通信パスが機能していることを確認してください。また、MediaAgent のインストール時に使用されるネットワーク インターフェイスが最初にネットワークにバインドされるように設定されていることを確認してください。ネットワーク インターフェイス カードの詳細については、「[ネットワーク要件](#)」を参照してください。

ファイアウォール

- **CommServe®** サーバー、**MediaAgent**、およびクライアントが双方向ファイアウォールを介して通信している場合：
 - ポート **8400** で、ファイアウォールを介した通信が許可されていることを確認します。
 - また、双方向ポート範囲 (連続または個別) が、ファイアウォールを介した接続として許可されている必要があります。ポート範囲の構成については、「[双方向ファイアウォールのポート要件](#)」を参照してください。
- **CommServe** サーバー、**MediaAgent**、およびクライアントが一方方向ファイアウォールを介して通信している場合：
 - ソフトウェアが使用する発信ポートの範囲 (連続または個別) を識別します。ポート範囲の構成については、「[一方方向ファイアウォールのポート要件](#)」を参照してください。
- **MediaAgent/クライアント**が **CommServe** サーバーと一方方向ファイアウォールを介して通信を行う場合、**MediaAgent/クライアント** コンピュータに必要なソフトウェアをインストールする前に、**CommServe** コンピュータに **MediaAgent/クライアント** ホスト名 (または **IP** アドレス) を追加しておく必要があります。

MediaAgent

- **Windows 2000** および **Windows 2003 Server** の場合：

iSCSI ドライバおよび Storport ドライバを使用するデバイスの場合、**Windows** の [コンピュータの管理] ウィンドウでライブラリのメディア チェンジャが有効になっていることを確認してください。その他のすべてのデバイスに関しては、**Windows** の [コンピュータの管理] ウィンドウでメディア チェンジャを無効化することをお勧めします。

メディア チェンジャを有効または無効にする方法については、「[ドライバ構成](#)」を参照してください。

NetApp NAS ファイル サーバー

- ストレージ デバイスへの接続については、ベンダのドキュメントを参照してください。
- **NetApp NAS** ファイル サーバーおよび **MediaAgent** マシンをライブラリにアタッチした後、インストールを始める前に、**NDMP** サービスが **NetApp** ファイル サーバーで有効であることを確認してください。

Microsoft Virtual Server へのインストール

- **MediaAgent** ソフトウェアを **Microsoft Virtual Server** にインストールする場合は、「[Microsoft Virtual Server のバックアップに関連した考慮事項](#)」を参照してください。

複数インスタンス作成

- 複数インスタンス作成機能を使用して、同じエージェントおよび **MediaAgent** ソフトウェアを 1 台のコンピュータに複数回インストールできますが、一部のコンポーネントでは複数インスタンス作成がサポートされていません。この制限は、インストールするコンポーネント、またはコンピュータ上に既にインストールされているコンポーネントに適用される場合があります。1 つのソフトウェア コンポーネントの複数インスタンスを同じコンピュータにインストールする前に、[\[複数インスタンス作成\]](#)に含まれている情報を確認し、インストール処理中に表示される追加画面については、「[複数インスタンス作成の使用方法](#)」節の指示に従います。◇

インストール チェックリスト

ソフトウェアをインストールする前に、次の情報を収集します。情報を記録するために提供された領域を使用し、この情報を障害復旧バインダで保持します。

1. インストール フォルダの場所: _____

詳細については、「[インストールするコンポーネントの選択](#)」を参照してください。

2. **CommServe** サーバーおよびクライアント コンピュータがファイアウォールを越えて通信する場合：

ファイアウォール ポート: _____

ファイアウォールの反対側のコンピュータのホスト名/IP アドレス、および対応する **GxCVD** ポート番号: _____

キープ アライブ間隔 (分): _____

発信トンネル接続のホスト名: _____

トンネル初期化間隔 (秒): _____

詳細については、「[ファイアウォール構成](#)」を参照してください。

3. CommServe ホスト名または CommServe IP アドレス: _____

詳細については、「[他のインストール オプションの構成](#)」を参照してください。

4. クライアント コンピュータ のホスト名 (NetBIOS 名) または IP アドレス _____

詳細については、「[他のインストール オプションの構成](#)」を参照してください。

5. 索引キャッシュ フォルダの場所: _____

詳細については、「[索引キャッシュ](#)」を参照してください。

6. このクライアントが関連付けられるクライアント グループ: _____

詳細については、「[クライアント グループの選択](#)」を参照してください。

7. 自動更新のインストールの時間および頻度: _____

詳細については、「[自動更新のスケジュール](#)」を参照してください。

開始する前に

- **MediaAgent** として使用するコンピュータに、そのコンピュータのローカル管理者として、または **Administrators** グループのメンバーとしてログオンします。
-

インストール手順

はじめに

1. Windows プラットフォームのソフトウェア インストール ディスクをディスク ドライブに挿入します。

数秒後に、インストール プログラムが開始されます。

インストール プログラムが自動的に開始されない場合:

- **Windows** タスク バーの [スタート] ボタンをクリックし、[ファイル名を指定して実行] をクリックします。
 - インストール ディスク ドライブにブラウズし、**Setup.exe** を選択し、[開く] をクリックして、[OK] をクリックします。
-

2. この画面では、インストール時に使用する言語を選択します。下矢印をクリックし、プルダウン リストから目的の言語を選択し、[次] をクリックして続行します。

3. ソフトウェアをインストールするオプションを選択します。

ノート

- この画面は、コンピュータ上で **bAllow32BitInstallOn64Bit** レジストリ キーが作成され、有効化されている場合にのみ表示されます。
-

4. ソフトウェアをコンピュータにインストールするオプションを選択します。

ノート

- 画面に表示されるオプションは、ソフトウェアがインストールされる

コンピュータによって異なります。

5. ようこそ画面を読みます。
他のアプリケーションが実行されていない場合は、[次] をクリックして続行します。
6. ウィルス検知ソフトウェアの警告を読みます。
ウィルス検知ソフトウェアが無効になっている場合は、[OK] をクリックして続行します。
7. ライセンス契約を読み、[ライセンス契約の条項に同意する] を選択します。
[次] をクリックして続行します。

インストールするコンポーネントの選択

8. インストールするコンポーネントを選択します。

ノート

- 表示される画面は、例とは異なる場合があります。
- 既にインストールされているか、またはインストールできないコンポーネントは、淡色表示 (選択不可) となります。コンポーネント上をポイントして、詳細情報を表示します。
- [使用中の特殊なレジストリ キー] フィールドは、コンピュータで `GalaxyInstallerFlags` レジストリ キーが有効化済みである場合に有効化されます。このフィールド上をポイントして、設定されているキーやその値を確認します。詳細については、「[レジストリ キー](#)」を参照してください。

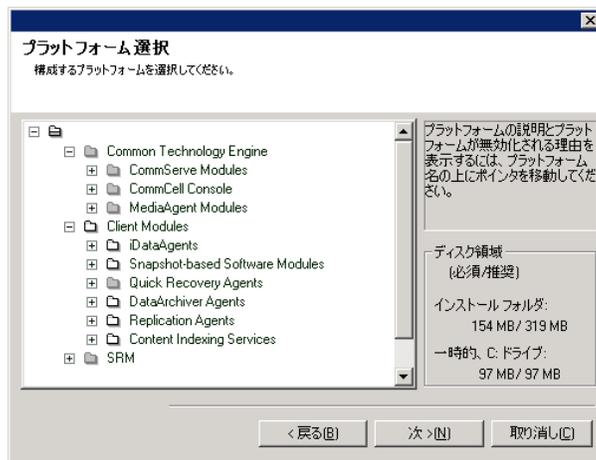
[次] をクリックして続行します。

MediaAgent をインストールするには、Common Technology Engine の下にある MediaAgent Modules を展開し、MediaAgent を選択します。

この場合、オプションで以下の **MediaAgent** コンポーネントを選択できます。

- **NDMP Remote Server** - このオプションは、アタッチされたライブラリが **MediaAgent** に存在し、データのバックアップ時に **MediaAgent** が NAS NDMP クライアントにより使用される場合に選択します (**CommServe** で適切なライセンスが必要です)。
- **Shared Dynamic Disks** - このオプションは、ストレージ用ディスクを **SAN** 内にある複数の **MediaAgent** で共有する場合に選択します。

このコンポーネントの詳細については、「[共有ダイナミックディスク ドライバのインストール](#)」を参照してください。



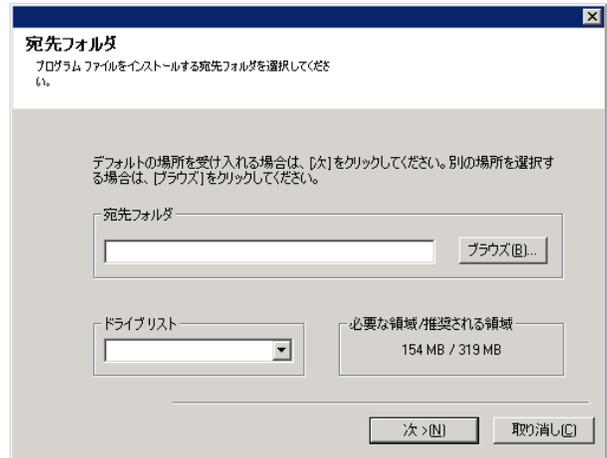
9. ソフトウェアをインストールする場所を指定します。

ノート

- マップされたネットワーク ドライブにソフトウェアをインストールしないでください。
- 宛先パスを指定するときは、次の文字を使用しないでください。
/: * ? " < > |
英数字のみを使用することをお勧めします。
- 他のコンポーネントをコンピュータにインストールする場合は、選択されたインストール ディレクトリがそのソフトウェアについても自動的に使用されます。
- コンポーネントが既にインストールされている場合、この画面は、インストーラが以前使用されたのと同じインストール場所を使用できるときには表示されません。
- Windows File System iDataAgent に対応する **スナップ バックアップ** を使用する場合、ファイラ ボリュームではない非システム ドライブにエージェントをインストールする必要があります。

[ブラウザ] をクリックして、ディレクトリを変更します。

[次] をクリックして続行します。



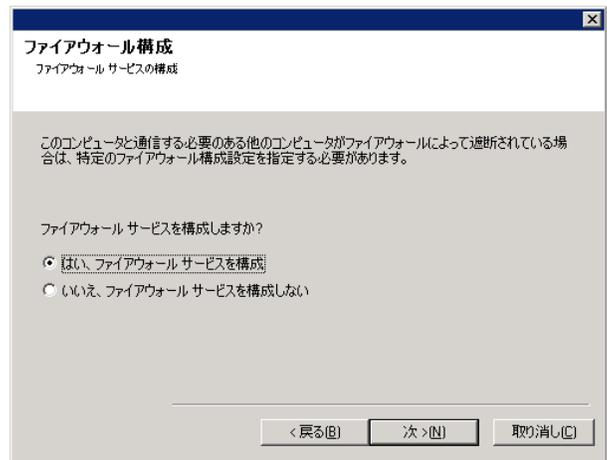
ファイアウォール構成

10. 以下から選択してください。

- クライアントがファイアウォールを越えて **CommServe** サーバーや **MediaAgent** と通信する場合は、[はい、ファイアウォール サービスを構成] を選択し、[次] をクリックして続行します。次のステップに進みます。
- ファイアウォール構成が必要ない場合は、[いいえ、ファイアウォール サービスを構成しない] をクリックし、[次] をクリックして続行します。次のセクションに進みます。

ノート

- Windows 2008 や Windows Vista などのオペレーティング システムには、複数のプロファイルが存在する場合があります。[いいえ] を選択してファイアウォール サービスを構成する場合は、プロファイル内でファイアウォール設定が有効化されていないことを確認してください。
- プロファイル内にファイアウォール設定が存在することをシステムが検出した場合、以下から選択する必要があります。
 - すべてのプロファイルに対してファイアウォールを無効化します; このオプションを選択した場合は注意してください。すべてのプロファイルでファイアウォール設定が無効化されません。この場合はシステムの再起動が必要です。再起動後、インストールは自動的に再開します。
 - ファイアウォールは無効です: ファイアウォール設定で **CommServe** コンピュータとの通信が許可されている場合は、このオプションを選択してください。ファイアウォール サービスを構成するには [戻る] をクリックします。



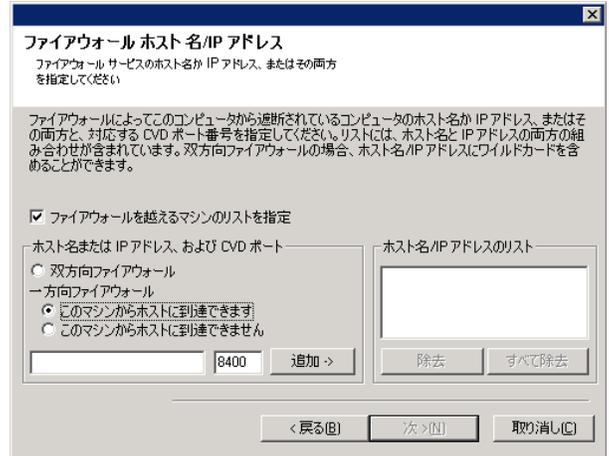
11. [ファイアウォールを越えるマシンのリストを指定] オプションをクリックし、ファイアウォールによってこのコンピュータから遮断されたホストのリストを指定します。ファイアウォールが双方向通信を許可しているか (ポート範囲を制限して) または一方方向通信 (リモート ホストのみがこのコンピュータに接続可能、またはその逆) を許可しているかを、必ず正確に説明します。

着信接続を許可するすべての一方方向ファイアウォール、およびポートフィルタリングの追加なしに発信接続を許可するその一方方向ファイアウォールについては、このステップをスキップします。

[次] をクリックして続行します。

ノート

- 以下を検討します。
 - **CommServe** サーバーの場合、このリストには、ファイアウォールの反対側のすべての **MediaAgent** およびクライアントが含まれている必要があります。
 - **MediaAgent/クライアント** の場合、このリストには、**CommServe** コンピュータとともに、ファイアウォールの反対側にあり通信が確立されるその他のすべてのクライアント /**MediaAgent** が含まれている必要があります。
- 構成するファイアウォールの反対側にあるマシンごとに、使用している環境のファイアウォール設定に基づいてファイアウォール構成タイプを選択します。以下のオプションから選択します。
 - 双方向ポートとして任意のポートを開ける場合は、[双方向ファイアウォール] をクリックします。
 - ファイアウォールの安全な側にあるマシン上で [一方方向ファイアウォール: このマシンからホストに到達できます] をクリックします。
 - ファイアウォールのパブリック /DMZ 側にあるマシン上で [一方方向ファイアウォール: このマシンからホストに到達できません] をクリックします。
- クラスタ環境のコンピュータと通信する場合は、クラスタ内のすべての物理ノードのホスト名/IP アドレス (**CommCell** コンポーネントがインストールされていない場合でも)、および **CommCell** コンポーネントがインストールされているすべての仮想ノードを必ず追加します。
- ホスト名またはホスト名の IP アドレスおよび GxCVD ポート番号を入力し、[追加] をクリックして、ホスト名/IP アドレス リストに追加します。



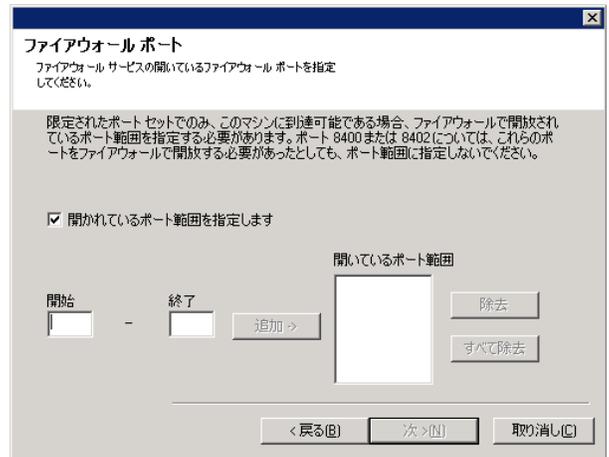
12. [限定開放ポートのリストを指定] オプションをクリックし、ポート範囲を指定します。ポートの開始範囲と終了範囲を追加し、[追加] をクリックして [開いているポートのリスト] に追加します。必要に応じて繰り返します。

このコンピュータを他のコンピュータと分離しているファイアウォールは着信接続を許可しているが、限られた範囲のポートでしか着信接続の確立が不可能である場合、ここで適切なポート範囲を構成します。その他のすべてのシナリオについては、このステップをスキップします。

ホスト名とポート番号を指定しない場合、ファイアウォール サービスは構成されません。

ノート

- 双方向ファイアウォールの場合は、通常、開いているポートをすべてのコンピュータに指定する必要があります。一方方向ファイアウォールでは、ポートが限られた方向に開いている場合、開いている側のコンピュータにポートを指定する必要があります。一方



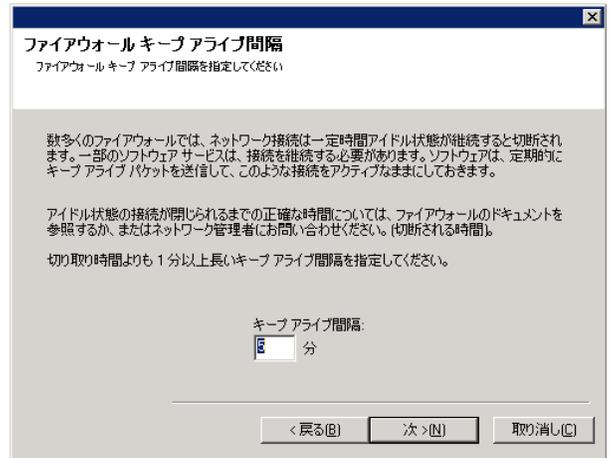
向ファイアウォールで、完全に閉じられているコンピュータについて、ポート範囲の指定は必要はありません。たとえば、ワークステーションのバックアップ エージェントでクライアントとして構成されたラップトップなどがそれに相当します。

- クラスタ環境では、ここで指定したファイアウォール ポートが、すべての物理ノードおよび仮想ノードで通信用に開かれていることを確認してください。

[次] をクリックして続行します。

13. 必要に応じて、キープ アライブ間隔を変更します。

[次] をクリックして続行します。



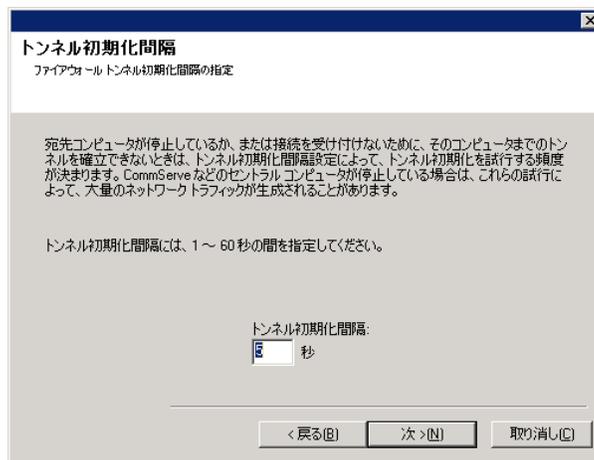
14. 必要に応じて、[高度なファイアウォール構成] を選択し、ファイアウォール経由の発信トンネル接続に使用するローカル ホスト名インターフェイスを指定します。指定しない場合、インターフェイスおよびポートは自動的に選択されます。

[次] をクリックして続行します。



15. 必要に応じて、トンネル初期化間隔を変更します。

[次] をクリックして続行します。



他のインストール オプションの構成

16. CommServe コンピュータの完全修飾ドメイン名を入力します。
(computer.company.com などの TCP/IP ネットワーク名)

ノート

- CommServe ホスト名に新しい名前を指定する場合は、スペースを使用しないでください。
- コンポーネントが既にインストールされている場合この画面は表示されず、代わりに、インストーラは以前指定したのと同じサーバー名を使用します。

[次] をクリックして続行します。

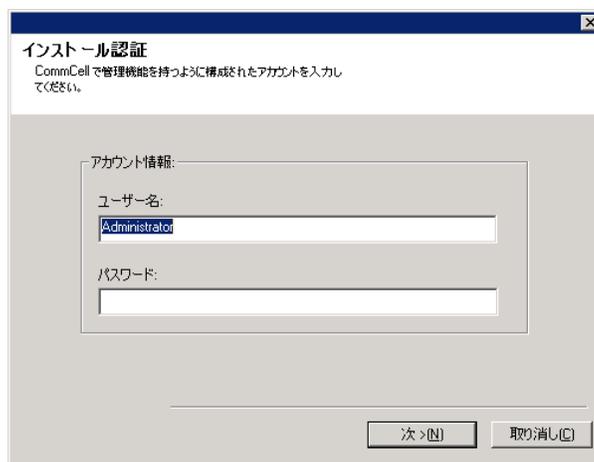


17. 外部ドメイン ユーザー アカウントまたは CommCell ユーザー アカウントの [ユーザー名] および [パスワード] 情報を入力します。これにより、CommCell へのエージェントのインストールが認証されます。

ノート

- このウィンドウは、[CommCell プロパティ] の [エージェントインストールに必要な認証] オプションが選択されている場合にのみ、表示されます。ユーザーは、管理機能を有効化するために、管理機能を持つユーザー グループに属している必要があります。詳細については、「[エージェント インストールの認証](#)」を参照してください。

[次] をクリックして続行します。



18. 以下を入力します。

- クライアント コンピュータのローカル (NetBIOS) 名。
- クライアント コンピュータが CommServe サーバーとの通信に使用する、NIC の TCP/IP IP ホスト名。

ノート

- クライアントに新しい名前を指定する場合は、スペースを使用しないでください。
- コンピュータに 1 つのネットワーク インターフェイスのみが存在する場合は、クライアント コンピュータのデフォルトのネットワーク インターフェイス名が表示されます。コンピュータに複数のネットワーク インターフェイスが存在する場合は、CommServe サーバーとの通信に優先的に使用するインターフェイス名を入力します。
- コンポーネントが既にインストールされている場合この画面は表示されず、代わりに、インストール プログラムは以前指定したのと同じ名称を使用します。

[次] をクリックして続行します。

19. 以下を指定し、[次] をクリックして続行します。

- クライアントのジョブ結果ディレクトリの場所を入力するか、または [ブラウズ] をクリックします。

ノート

- ジョブ結果ディレクトリは、エージェントがクライアントのバックアップおよびリストア ジョブ結果を保存するのに使用します。
- クラスタ連続レプリケーション (CCR) 機能のある Windows および Exchange Database 2007 iDataAgent では、UNC パスがサポートされていますが、この画面では指定できません。インストール完了後、ジョブ結果パスを UNC パスに変更することができます。UNC パス全般に関する情報については、「[UNC パスのジョブ結果ディレクトリの使用](#)」を参照してください。
- VSS システム状態リストアおよび非 VSS システム状態リストアでは、ジョブ結果パスとリストア対象のデータとが同じドライブに存在する必要があります。
- スナップ バックアップの場合、ジョブ結果ディレクトリがシステム ドライブに存在する必要があります。

クライアント グループの選択

20. クライアント グループをリストから選択します。

[次] をクリックして続行します。

ノート

- この画面は、クライアント グループが **CommCell Console** で構成されている場合にのみ表示されます。詳細については、「[クライアント コンピュータ グループ](#)」を参照してください。

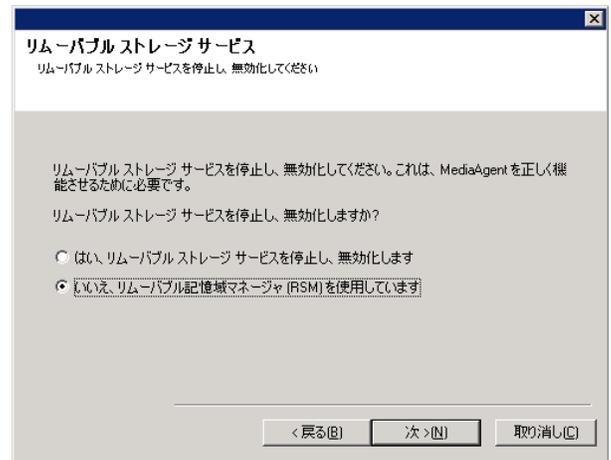


21. [はい] を選択して、MediaAgent のリムーバブル ストレージ サービスを停止します。

ノート

- リムーバブル ストレージ サービスがコンピュータで既に無効になっている場合、このプロンプトは表示されません。

[次] をクリックして続行します。



索引キャッシュ

22. MediaAgent の索引キャッシュの場所を指定します。

ノート

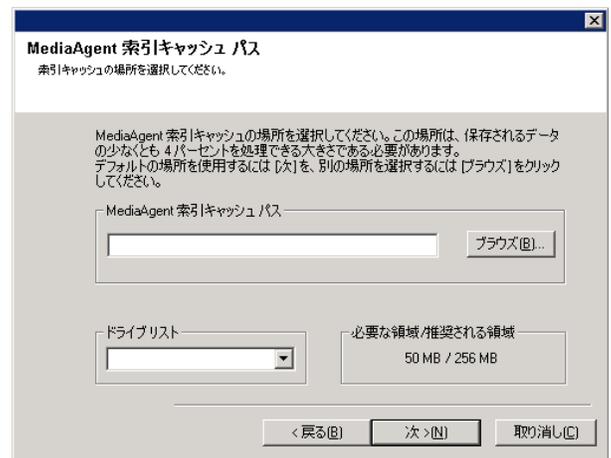
- デフォルトの場所を指定するか、別の場所を選択します。ただし、いずれの場合も、ローカルな場所を選択してください。

MediaAgent ソフトウェアのインストール後、必要ならいつでも、**CommCell Console** から索引キャッシュの場所をネットワーク ドライブに変更することができます。

- **Windows 2000** の場合、索引キャッシュにネットワーク パスを選択すると、インストールを続行するためにログオフして再度ログインすることを求められる場合があります。
- 索引キャッシュの場所には、索引キャッシュのみを保持する、パーティションで区切られたドライブを選択することをお勧めします。
- 索引キャッシュに必要な領域の計算については、「[索引キャッシュに必要なストレージ領域の計算](#)」を参照してください。

[ブラウズ] をクリックして、ディレクトリを変更します。

[次] をクリックして続行します。

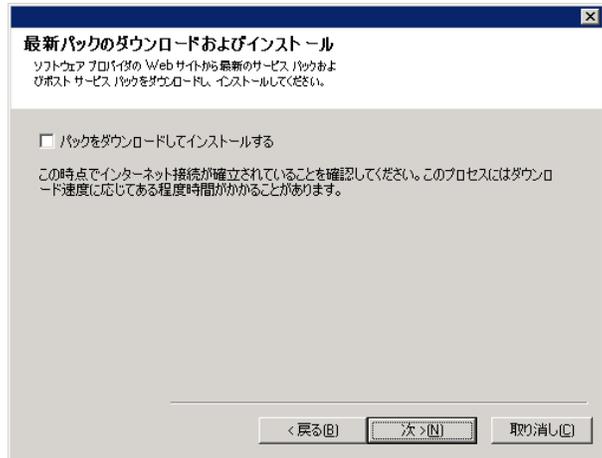


23. [パックをダウンロードしてインストールする] を選択して、最新のサービス パックおよびポスト パックをソフトウェア プロバイダからダウンロードしてインストールします。

ノート

- 更新をダウンロードするには、インターネット接続が必要です。
- このステップは、最初のインスタンスにインストールする場合に適用されます。
- 更新は、以下のディレクトリにダウンロードされます。
<software installation>/Base/Temp/DownloadedPacks.
これらは、サイレントに開始され、最初のインスタンスに自動的にインストールされます。

[次] をクリックして続行します。



インストール オプションのサマリの確認

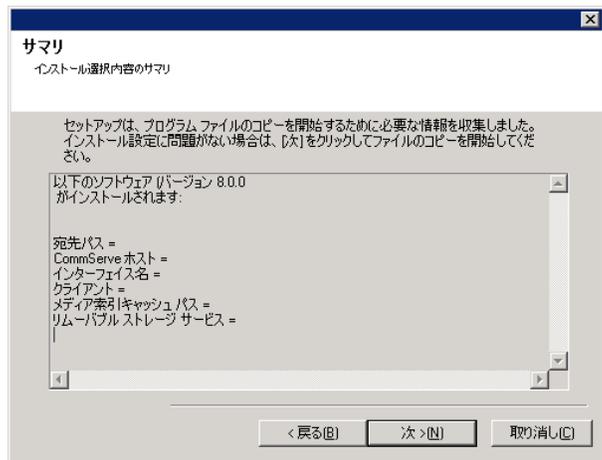
24. 選択されたオプションのサマ리를確認します。

ノート

- 画面の [サマリ] には、インストールすることを選択したコンポーネントが表示されます。この表示は、例とは異なる場合があります。

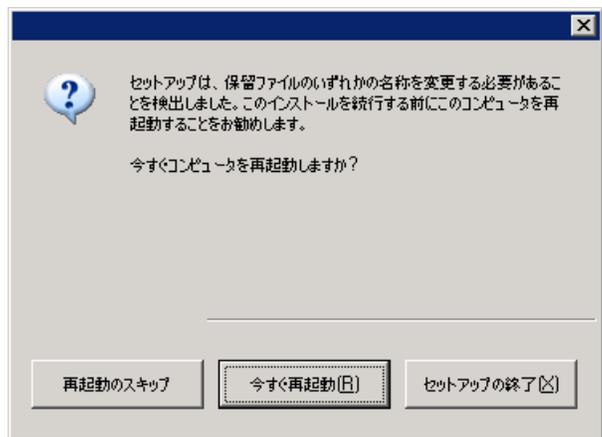
[次] をクリックして続行するか、または [戻る] をクリックしてオプションを変更します。

これで、インストール プログラムによって、コンピュータへのソフトウェアのコピーが開始されます。このステップは完了まで数分かかる場合があります。



25. システムの再起動メッセージが表示される場合があります。その場合は、以下のいずれかを選択します。

- [再起動のスキップ]
このオプションは、他のアプリケーションに属しており、置換が必要なファイルをインストール プログラムが検出すると表示されます。これらのファイルはこのインストールでは重要でないため、再起動をスキップしてインストールを続行したり、コンピュータを後で再起動したりできます。
- 今すぐ再起動
[再起動のスキップ] オプションなしでこのオプションが表示される場合は、インストール プログラムによって、ソフトウェアに必要であり、現在使用中で置換する必要のあるファイルが検出されたことを示します。[今すぐ再起動] が [再起動のスキップ] オプションなしで表示された場合は、この時点でコンピュータを再起動します。再起動後にインストール プログラムが自動的に続行されます。
- [セットアップの終了]
インストール プログラムを終了する場合は、[セットアップの終了] をクリックします。



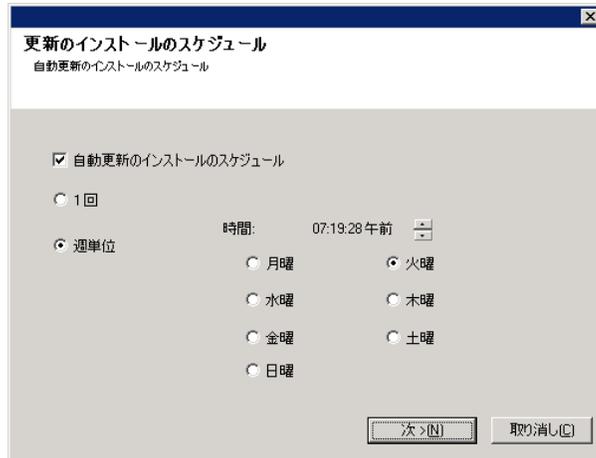
自動更新のスケジュール

26. 必要に応じて、ソフトウェア更新の自動インストールをスケジュールするためにこのオプションを選択します。

ノート

- "更新のインストールのスケジュール" を使用すると、必要なソフトウェア更新をコンピュータに 1 回または週単位で自動的にインストールできます。このオプションを選択しない場合は、これらの更新を後で **CommCell Console** からスケジュールすることができます。
- 競合を回避するために、ソフトウェア更新の自動インストールが、ソフトウェア更新の自動 **FTP** ダウンロードと同時に発生するようにスケジュールしないでください。
- サービスを再開する前に、コンピュータの再起動を求められる場合があります。
- コンポーネントが既にインストールされている場合この画面は表示されず、代わりに、インストーラは以前指定したのと同じオプションを使用します。

[次] をクリックして続行します。

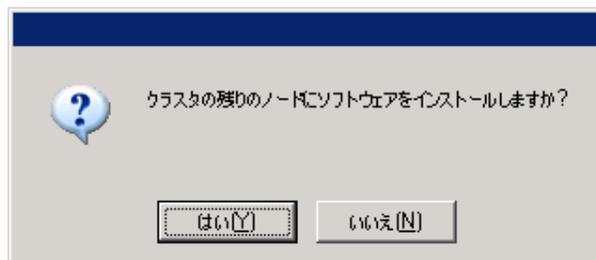


残りのクラスタ ノードのインストール

27. クラスタ環境内の物理ノードにソフトウェアをインストール/アップグレードする場合は、このオプションを使用して、クラスタの残りの物理ノードにソフトウェアをインストール/アップグレードします。

- クラスタの残りのノードでソフトウェアをインストール/更新するには、[はい] をクリックします。
- このノードでのインストール/アップグレードで完了する場合は、[いいえ] をクリックします。

ステップ バイ ステップの指示については、「[残りのクラスタ ノードのインストール/アップグレード](#)」を参照してください。



セットアップ完了

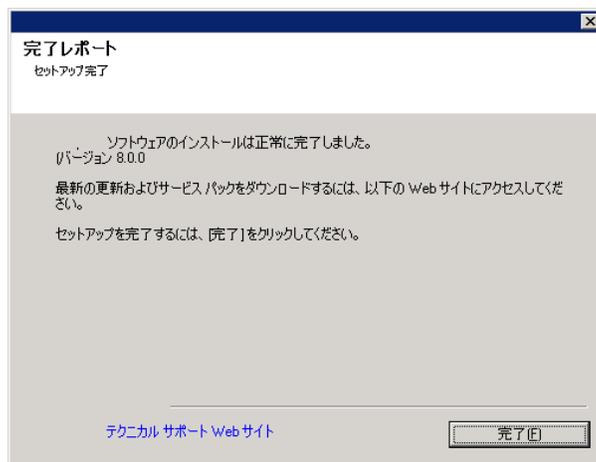
28. セットアッププログラムによって、正常にインストールされたコンポーネントが表示されます。

ノート

- 画面上に表示された "セットアップ完了" メッセージには、インストールしたコンポーネントが表示されます。この表示は、例とは異なる場合があります。
- **CommCell Console** を開いたままエージェントをインストールした場合、新しいエージェントを確認するには、**CommCell Console** をリフレッシュ (**F5**) する必要があります。
- [今すぐ再起動] ボタンが表示された場合は、コンピュータで他の操作を実行する前にコンピュータを再起動してください。

[完了] をクリックして、インストール プログラムを閉じます。

これでインストールは完了です。



インストール後の考慮事項

一般

- このソフトウェアのリリース後に発表された、リリース後更新やサービス パックをインストールします。サービス パックをインストールする場合は、CommServe サーバーにインストールされているのと同じバージョンであることを確認します。または、[自動更新] を有効にして、CommCell コンポーネントの更新をすばやく簡単にインストールすることもできます。
- CommServe[®] または MediaAgent ソフトウェアをインストールすると、ホスト コンピュータの CommCell ブラウザにクライアント コンピュータとして表示されます。CommCell Console の CommServe または MediaAgent クライアント コンピュータの前にあるアラート アイコンは、エージェント ソフトウェアが、CommCell のクライアントとして使用されるためにコンピュータ上にインストールされている必要があることを示しています。

MediaAgent 固有

- MediaAgent を使用してデータ保護操作を実行する前に、ライブラリおよびドライブを構成する必要があります (詳細については、「ライブラリおよびドライブ構成」を参照)。

MediaAgent ソフトウェアでは、さまざまなタイプのライブラリおよびライブラリ構成がサポートされています。詳細については、以下の節を参照してください。

- ブラインド ライブラリ
 - Centera クラスタ
 - 直接アタッチされたライブラリ
 - 直接アタッチされた共有ライブラリ
 - HDS データ保持ユーティリティ (DRU)
 - IP ライブラリ (ACSLs サーバーにアタッチされたライブラリなど)
 - 磁気ライブラリ
 - NAS NDMP ライブラリ
 - オプティカル ライブラリ
 - SAN を経由してアタッチされたライブラリ
 - スタンドアロン ドライブ
 - 仮想テープ ライブラリ
-

Microsoft Windows File System iDataAgent のインストール

ソフトウェアのインストールに関するそれぞれの節に移動するには、以下のリンクをクリックします。

- [インストール要件](#)
 - [インストール チェックリスト](#)
 - [開始する前に](#)
 - [インストール手順](#)
 - [はじめに](#)
 - [インストールするコンポーネントの選択](#)
 - [ファイアウォール構成](#)
 - [他のインストール オプションの構成](#)
 - [クライアント グループの選択](#)
 - [グローバル フィルタの選択](#)
 - [ストレージ ポリシーの選択](#)
 - [サービス パックのインストール](#)
 - [インストール オプションのサマリの確認](#)
 - [自動更新のスケジュール](#)
 - [残りのクラスタ ノードのインストール](#)
 - [セットアップ完了](#)
 - [インストール後の考慮事項](#)
-

インストール要件

Windows File System iDataAgent をインストールしたコンピュータから、iDataAgent はデータを保護します (このコンピュータをこのインストール手順では、クライアント コンピュータと呼びます)。

ソフトウェアをインストールするコンピュータが、「[システム要件 -Microsoft Windows File System iDataAgent](#)」で指定されている最小要件を満たしていることを確認してください。

QSnap² サービスを Windows File System iDataAgent と一緒に使用して、ロックされたファイルをバックアップする場合、以下の手順とは異なります。両方ともインストールする手順については、「[QSnap のインストール - Windows](#)」を参照してください。

以下の節では、Windows File System iDataAgent のインストールに関係した手順について説明します。追加のコンポーネントを同時にインストールする場合、各コンポーネントのインストール要件および手順については、該当する手順を参照してください。複数のコンポーネントをインストールする場合、インストール手順の順序が前後することがあります。

ソフトウェアをインストールする前に、以下のインストール要件を確認してください。

一般

- エージェントをインストールするには、CommServe および少なくとも 1 つの MediaAgent が既にインストールされている必要があります。さらに、エージェントをインストールする前に、CommServe[®] ソフトウェアおよび MediaAgent がインストール済みで、かつ実行中である (同じコンピュータ上である必要はない) ことを確認してください。
- iDataAgent または 1-Touch Server アプリケーションをインストールするコンピュータにも、File System iDataAgent をインストールする必要があります。
- 本ソフトウェアは、現在のバージョンの CommServe サーバーおよび MediaAgent ソフトウェアがインストールされている CommCell コンポーネントにインストールしてください。
- すべてのアプリケーションを閉じ、ウイルス対策、スクリーン セーバー、オペレーティング システム ユーティリティなどの自動的に実行されるすべてのプログラムを無効にします。さまざまなウイルス対策プログラムなどの一部のプログラムは、サービスとして実行される場合があります。開始する前にこのようなサービスを停止および無効にします。インストール後にこれらのサービスを再び有効化することができます。
- CommServe ソフトウェアでエージェントのライセンスが有効であることを確認します。
- お手持ちのソフトウェア インストール ディスクが、インストール先のコンピュータのオペレーティング システムに対応していることを確認します。
ソフトウェアのインストールを開始する前に、最新のソフトウェア インストール ディスクがあることを確認してください。確認できない場合は、ソフトウェア プロバイダにお問い合わせください。

ファイアウォール

- **CommServe®** サーバー、**MediaAgent**、およびクライアントが双方向ファイアウォールを介して通信している場合：
 - ポート **8400** で、ファイアウォールを介した通信が許可されていることを確認します。
 - また、双方向ポート範囲 (連続または個別) が、ファイアウォールを介した接続として許可されている必要があります。ポート範囲の構成については、「[双方向ファイアウォールのポート要件](#)」を参照してください。
- **CommServe** サーバー、**MediaAgent**、およびクライアントが一方方向ファイアウォールを介して通信している場合：
 - ソフトウェアが使用する発信ポートの範囲 (連続または個別) を識別します。ポート範囲の構成については、「[一方方向ファイアウォールのポート要件](#)」を参照してください。
- **MediaAgent/クライアント**が一方方向ファイアウォールを介して **CommServe** サーバーと通信を行う場合、**MediaAgent/クライアント** コンピュータに必要なソフトウェアをインストールする前に、**CommServe** コンピュータに **MediaAgent/クライアント** ホスト名 (または **IP** アドレス) を追加しておく必要があります。

複数インスタンス作成

- 複数インスタンス作成機能を使用して、同じエージェントおよび **MediaAgent** ソフトウェアを **1** 台のコンピュータに複数回インストールできますが、一部のコンポーネントでは複数インスタンス作成がサポートされていません。この制限は、インストールするコンポーネント、またはコンピュータ上に既にインストールされているコンポーネントに適用される場合があります。1 つのソフトウェア コンポーネントの複数インスタンスを同じコンピュータにインストールする前に、[\[複数インスタンス作成\]](#) に含まれている情報を確認し、インストール処理中に表示される追加画面については、「[複数インスタンス作成の使用方法](#)」節の指示に従います。◇

インストール チェックリスト

ソフトウェアをインストールする前に、次の情報を収集します。情報を記録するために提供された領域を使用し、この情報を障害復旧バインダで保持します。

1. インストール フォルダの場所: _____

詳細については、「[インストールするコンポーネントの選択](#)」を参照してください。

2. **CommServe** サーバーおよびクライアント コンピュータがファイアウォールを越えて通信する場合:

ファイアウォール ポート: _____

ファイアウォールの反対側のコンピュータのホスト名/IP アドレス、および対応する **GxCVD** ポート番号: _____

キープ アライブ間隔 (分): _____

発信トンネル接続のホスト名: _____

トンネル初期化間隔 (秒): _____

詳細については、「[ファイアウォール構成](#)」を参照してください。

3. **CommServe** ホスト名または **CommServe IP** アドレス: _____

詳細については、「[他のインストール オプションの構成](#)」を参照してください。

4. クライアント コンピュータ のホスト名 (**NetBIOS** 名) または **IP** アドレス _____

詳細については、「[他のインストール オプションの構成](#)」を参照してください。

5. ジョブ結果フォルダの場所: _____

指定したフォルダの名前とパスワード (必要な場合): _____

詳細については、「[他のインストール オプションの構成](#)」を参照してください。

6. デフォルトのサブクライアントで使用するストレージ ポリシー:

詳細については、「[ストレージ ポリシーの選択](#)」を参照してください。

7. このクライアントが関連付けられるクライアント グループ:

詳細については、「[クライアント グループの選択](#)」を参照してください。

8. 自動更新のインストールの時間および頻度:

詳細については、「[自動更新のスケジュール](#)」を参照してください。

開始する前に

- ローカル管理者、またはコンピュータの **Administrators** グループのメンバとしてクライアントにログオンします。

インストール手順

はじめに

1. **Windows** プラットフォームのソフトウェア インストール ディスクをディスク ドライブに挿入します。
数秒後に、インストール プログラムが開始されます。
インストール プログラムが自動的に開始されない場合：
 - **Windows** タスク バーの [スタート] ボタンをクリックし、[ファイル名を指定して実行] をクリックします。
 - インストール ディスク ドライブにブラウズし、**Setup.exe** を選択し、[開く] をクリックして、[OK] をクリックします。
2. この画面では、インストール時に使用する言語を選択します。下矢印をクリックし、プルダウン リストから目的の言語を選択し、[次] をクリックして続行します。
3. ソフトウェアをインストールするオプションを選択します。
ノート
 - この画面は、コンピュータ上で **bAllow32BitInstallOn64Bit** レジストリ キーが作成され、有効化されている場合にのみ表示されます。
4. ソフトウェアをコンピュータにインストールするオプションを選択します。
ノート
 - 画面に表示されるオプションは、ソフトウェアがインストールされるコンピュータによって異なります。
5. ようこそ画面を読みます。
他のアプリケーションが実行されていない場合は、[次] をクリックして続行します。

6. ウィルス検知ソフトウェアの警告を読みます。
- ウィルス検知ソフトウェアが無効になっている場合は、[OK] をクリックして続行します。
7. ライセンス契約を読み、[ライセンス契約の条項に同意する] を選択します。
- [次] をクリックして続行します。

インストールするコンポーネントの選択

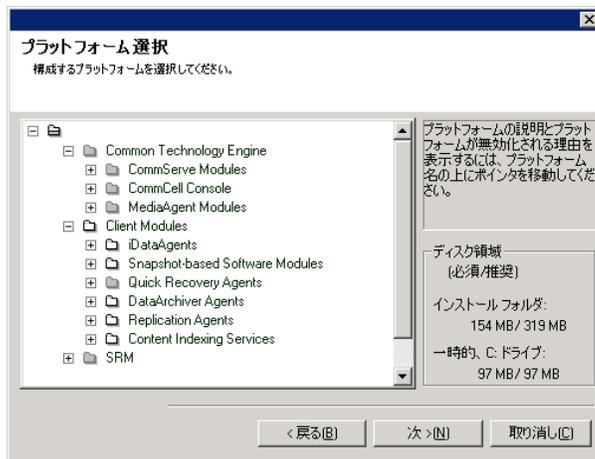
8. インストールするコンポーネントを選択します。

ノート

- 表示される画面は、例とは異なる場合があります。
- 既にインストールされているか、またはインストールできないコンポーネントは、淡色表示 (選択不可) となります。コンポーネント上をポイントして、詳細情報を表示します。
- [使用中の特殊なレジストリ キー] フィールドは、コンピュータで GalaxyInstallerFlags レジストリ キーが有効化済みである場合に有効化されます。このフィールド上をポイントして、設定されているキーやその値を確認します。詳細については、「[レジストリ キー](#)」を参照してください。

[次] をクリックして続行します。

Microsoft Windows File System *iDataAgent* をインストールするには、Client Modules フォルダおよび *iDataAgent* フォルダを展開し、使用しているオペレーティング システムに対応した *iDataAgent* を選択します。



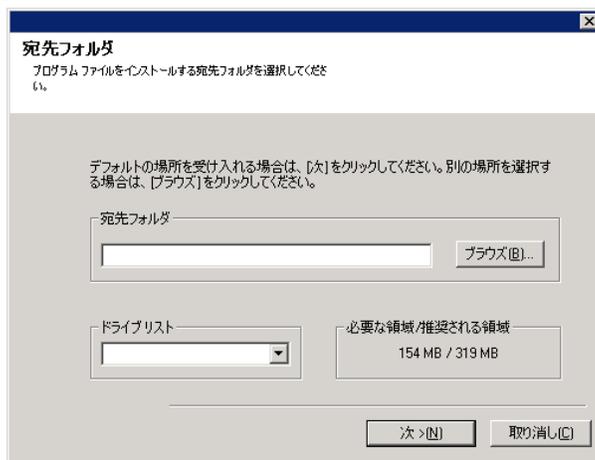
9. ソフトウェアをインストールする場所を指定します。

ノート

- マップされたネットワーク ドライブにソフトウェアをインストールしないでください。
- 宛先パスを指定するときは、次の文字を使用しないでください。 / : * ? " < > |
英数字のみを使用することをお勧めします。
- 他のコンポーネントをコンピュータにインストールする場合は、選択されたインストール ディレクトリがそのソフトウェアについても自動的に使用されます。
- コンポーネントが既にインストールされている場合、この画面は、インストーラが以前使用されたのと同じインストール場所を使用できるときには表示されません。
- Windows File System *iDataAgent* に対応する [スナップ バックアップ](#) を使用する場合、ファイラ ボリュームではない非システム ドライブにエージェントをインストールする必要があります。

[ブラウザ] をクリックして、ディレクトリを変更します。

[次] をクリックして続行します。



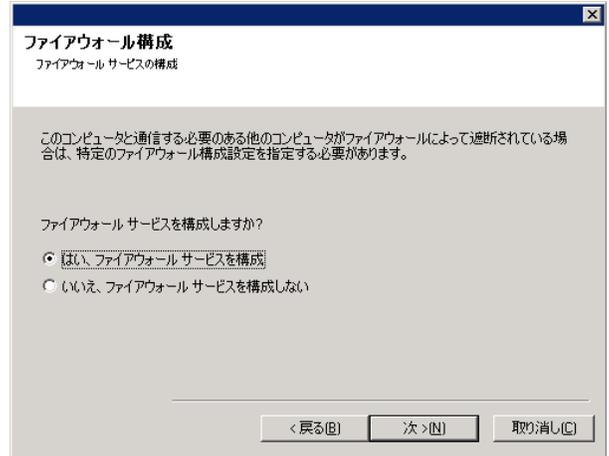
ファイアウォール構成

10. 以下から選択してください。

- クライアントがファイアウォールを越えて **CommServe** サーバーや **MediaAgent** と通信する場合は、[はい、ファイアウォール サービスを構成] を選択し、[次] をクリックして続行します。次のステップに進みます。
- ファイアウォール構成が必要ない場合は、[いいえ、ファイアウォール サービスを構成しない] をクリックし、[次] をクリックして続行します。次のセクションに進みます。

ノート

- **Windows 2008** や **Windows Vista** などのオペレーティング システムには、複数のプロファイルが存在する場合があります。[いいえ] を選択してファイアウォール サービスを構成する場合は、プロファイル内でファイアウォール設定が有効化されていないことを確認してください。
- プロファイル内にファイアウォール設定が存在することをシステムが検出した場合、以下から選択する必要があります。
 - すべてのプロファイルに対してファイアウォールを無効化します:このオプションを選択した場合は注意してください。すべてのプロファイルでファイアウォール設定が無効化されません。この場合はシステムの再起動が必要です。再起動後、インストールは自動的に再開します。
 - ファイアウォールは無効です:ファイアウォール設定で **CommServe** コンピュータとの通信が許可されている場合は、このオプションを選択してください。ファイアウォール サービスを構成するには [戻る] をクリックします。



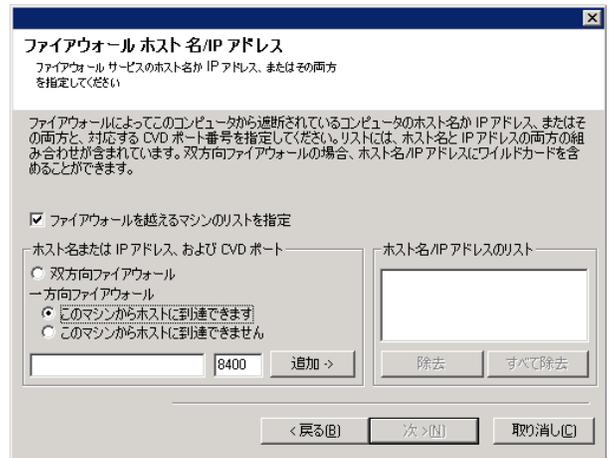
11. [ファイアウォールを越えるマシンのリストを指定] オプションをクリックし、ファイアウォールによってこのコンピュータから遮断されたホストのリストを指定します。ファイアウォールが双方向通信を許可しているか (ポート範囲を制限して) または一方方向通信 (リモート ホストのみがこのコンピュータに接続可能、またはその逆) を許可しているかを、必ず正確に説明します。

着信接続を許可するすべての一方方向ファイアウォール、およびポート フィルタリングの追加なしに発信接続を許可するその一方方向ファイアウォールについては、このステップをスキップします。

[次] をクリックして続行します。

ノート

- 以下を検討します。
 - **CommServe** サーバーの場合、このリストには、ファイアウォールの反対側のすべての **MediaAgent** およびクライアントが含まれている必要があります。
 - **MediaAgent/クライアント** の場合、このリストには、**CommServe** コンピュータとともに、ファイアウォールの反対側にあり通信が確立されるその他のすべてのクライアント /**MediaAgent** が含まれている必要があります。
- 構成するファイアウォールの反対側にあるマシンごとに、使用している環境のファイアウォール設定に基づいてファイアウォール構成タイプを選択します。以下のオプションから選択します。
 - 双方向ポートとして任意のポートを開ける場合は、[双方向ファイアウォール] をクリックします。
 - ファイアウォールの安全な側にあるマシン上で [一方方向ファイアウォール: このマシンからホストに到達できます] をクリックします。
 - ファイアウォールのパブリック /DMZ 側にあるマシン上で



[一方向ファイアウォール: このマシンからホストに到達できません] をクリックします。

- クラスタ環境のコンピュータと通信する場合は、クラスタ内のすべての物理ノードのホスト名/IP アドレス (CommCell コンポーネントがインストールされていない場合でも)、および CommCell コンポーネントがインストールされているすべての仮想ノードを必ず追加します。
- ホスト名またはホスト名の IP アドレスおよび GxCVD ポート番号を入力し、[追加] をクリックして、ホスト名/IP アドレス リストに追加します。

- 12.** [限定開放ポートのリストを指定] オプションをクリックし、ポート範囲を指定します。ポートの開始範囲と終了範囲を追加し、[追加] をクリックして [開いているポートのリスト] に追加します。必要に応じて繰り返します。

このコンピュータを他のコンピュータと分離しているファイアウォールは着信接続を許可しているが、限られた範囲のポートでしか着信接続の確立が不可能である場合、ここで適切なポート範囲を構成します。その他のすべてのシナリオについては、このステップをスキップします。

ホスト名とポート番号を指定しない場合、ファイアウォール サービスは構成されません。

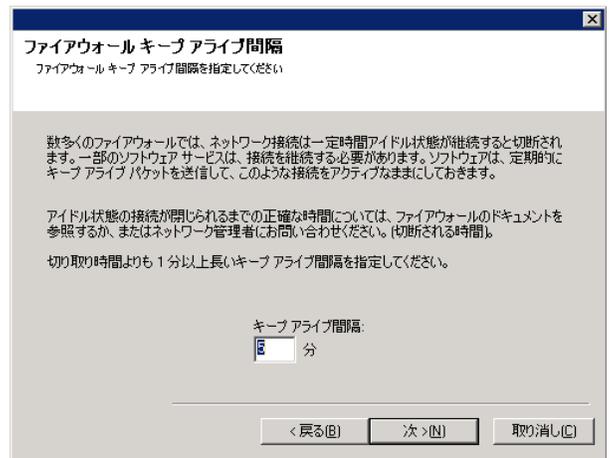
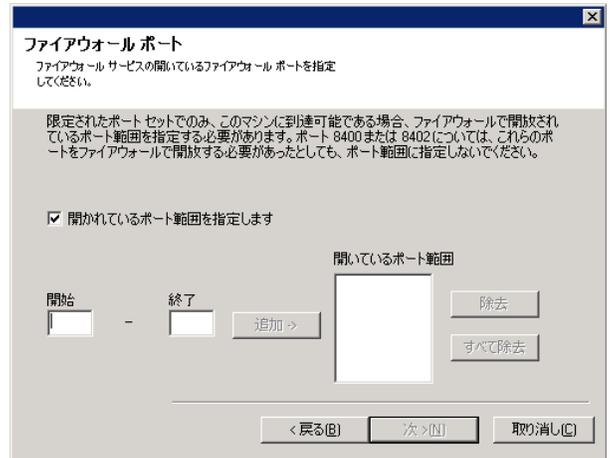
ノート

- 双方向ファイアウォールの場合は、通常、開いているポートをすべてのコンピュータに指定する必要があります。一方向ファイアウォールでは、ポートが限られた方向に開いている場合、開いている側のコンピュータにポートを指定する必要があります。一方向ファイアウォールで、完全に閉じられているコンピュータについて、ポート範囲の指定は必要はありません。たとえば、ワークステーションのバックアップ エージェントでクライアントとして構成されたラップトップなどがそれに相当します。
- クラスタ環境では、ここで指定したファイアウォール ポートが、すべての物理ノードおよび仮想ノードで通信用に開かれていることを確認してください。

[次] をクリックして続行します。

- 13.** 必要に応じて、キープ アライブ間隔を変更します。

[次] をクリックして続行します。



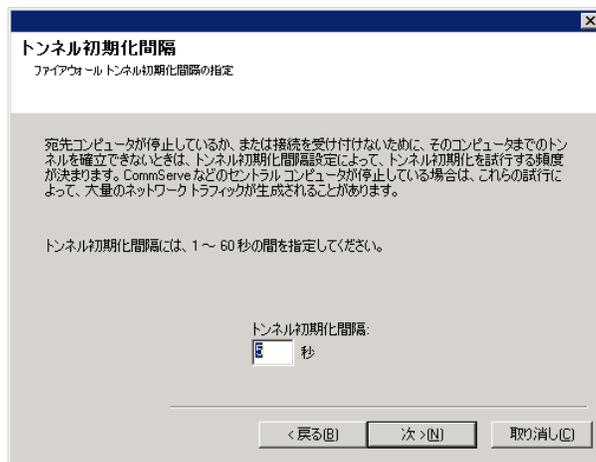
14. 必要に応じて、[高度なファイアウォール構成] を選択し、ファイアウォール経由の発信トンネル接続に使用するローカル ホスト名インターフェイスを指定します。指定しない場合、インターフェイスおよびポートは自動的に選択されます。

[次] をクリックして続行します。



15. 必要に応じて、トンネル初期化間隔を変更します。

[次] をクリックして続行します。



他のインストール オプションの構成

16. CommServe コンピュータの完全修飾ドメイン名を入力します。(computer.company.com などの TCP/IP ネットワーク名)

ノート

- CommServe ホスト名に新しい名前を指定する場合は、スペースを使用しないでください。
- コンポーネントが既にインストールされている場合この画面は表示されず、代わりに、インストーラは以前指定したのと同じサーバー名を使用します。

[次] をクリックして続行します。



17. 外部ドメイン ユーザー アカウントまたは **CommCell** ユーザー アカウントの [ユーザー名] および [パスワード] 情報を入力します。これにより、**CommCell** へのエージェントのインストールが認証されます。

ノート

- このウィンドウは、[**CommCell** プロパティ] の [エージェントインストールに必要な認証] オプションが選択されている場合のみ、表示されます。ユーザーは、管理機能を有効化するために、管理機能を持つユーザー グループに属している必要があります。詳細については、「**エージェント インストールの認証**」を参照してください。

[次] をクリックして続行します。

18. 以下を入力します。

- クライアント コンピュータのローカル (NetBIOS) 名。
- クライアント コンピュータが **CommServe** サーバーとの通信に使用する、NIC の TCP/IP IP ホスト名。

ノート

- クライアントに新しい名前を指定する場合は、スペースを使用しないでください。
- コンピュータに 1 つのネットワーク インターフェイスのみが存在する場合は、クライアント コンピュータのデフォルトのネットワーク インターフェイス名が表示されます。コンピュータに複数のネットワーク インターフェイスが存在する場合は、**CommServe** サーバーとの通信に優先的に使用するインターフェイス名を入力します。
- コンポーネントが既にインストールされている場合この画面は表示されず、代わりに、インストール プログラムは以前指定したのと同じ名称を使用します。

[次] をクリックして続行します。

19. 以下を指定し、[次] をクリックして続行します。

- クライアントのジョブ結果ディレクトリの場所を入力するか、または [ブラウズ] をクリックします。

ノート

- ジョブ結果ディレクトリは、エージェントがクライアントのバックアップおよびリストア ジョブ結果を保存するのに使われます。
- クラスタ連続レプリケーション (CCR) 機能のある Windows および Exchange Database 2007 iDataAgent では、UNC パスがサポートされていますが、この画面では指定できません。インストール完了後、ジョブ結果パスを UNC パスに変更することができます。UNC パス全般に関する情報については、「**UNC パスのジョブ結果ディレクトリの使用**」を参照してください。
- VSS システム状態リストアおよび非 VSS システム状態リストアでは、ジョブ結果パスとリストア対象のデータとが同じドライブに存在する必要があります。
- スナップ バックアップの場合、ジョブ結果ディレクトリがシステム ドライブに存在する必要があります。

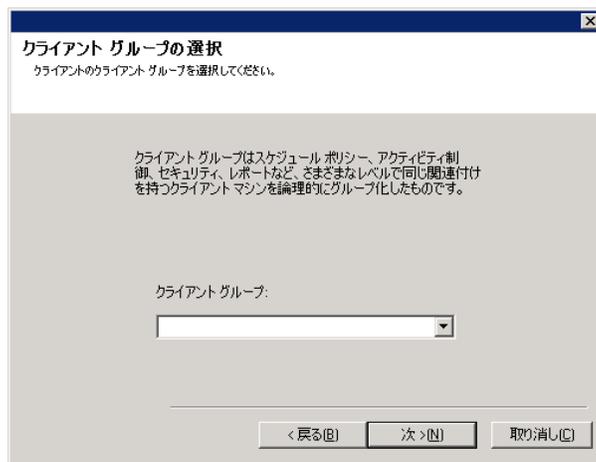
クライアント グループの選択

20. クライアント グループをリストから選択します。

[次] をクリックして続行します。

ノート

- この画面は、クライアント グループが **CommCell Console** で構成されている場合にのみ表示されます。詳細については、「**クライアント コンピュータ グループ**」を参照してください。



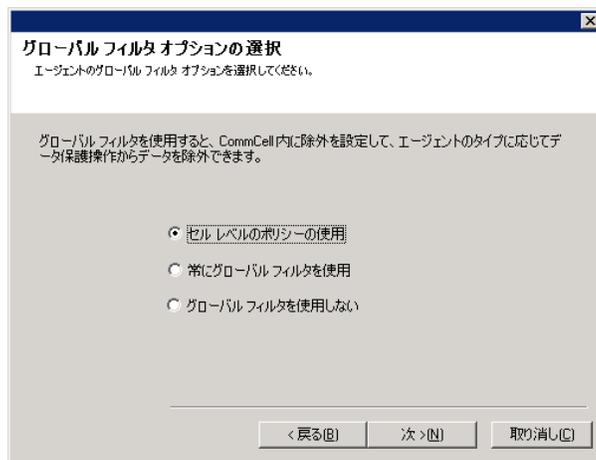
グローバル フィルタの選択

21. デフォルトのサブクライアントに必要なグローバル フィルタ オプションを選択し、[次] をクリックして続行します。

ノート

- [セル レベルのポリシーの使用] を選択すると、**CommCell** に設定されたグローバル フィルタ ポリシー構成が継承されます。つまり、[グローバル フィルタ] ダイアログ ボックスで (**CommCell Console** のコントロール パネルからアクセス) [すべてのサブクライアントでグローバル フィルタを使用] オプションが選択されている場合、グローバル フィルタ ポリシーがデフォルトのサブクライアントにも適用されます。このオプションが選択されていない場合、グローバル フィルタはデフォルトのサブクライアントに適用されません。
- [常にグローバル フィルタを使用] を選択すると、**CommCell** に設定されたポリシーに関係なくデフォルトのサブクライアントにグローバル フィルタ ポリシーが適用されます。
- [グローバル フィルタを使用しない] を選択すると、**CommCell** に設定されたポリシーに関係なく、デフォルトのサブクライアントへのグローバル フィルタの適用は無視されます。

[次] をクリックして続行します。



ストレージ ポリシーの選択

22. 表示されたコンポーネント (サブクライアント、インスタンスなど) のバックアップ/アーカイブに適用するストレージ ポリシーを選択します。

ノート

- ストレージ ポリシーは、バックアップ データを送信するメディア ライブラリを定義します。各ライブラリには、デフォルトのストレージ ポリシーがあります。
- 多くの場合、エージェントをインストールすると、インストールプログラムによりデフォルトのサブクライアントが作成されません。
- クライアント ソフトウェアのインストール後、必要ならいつでもストレージ ポリシーを変更することができます。
- 適用可能な場合、デフォルトのサブクライアントのグローバル フィルタを有効にします。
- 複数のエージェントを選択してインストールした場合、この画面は複数回表示されます。これにより、インストールした各エージェントに関連付けるストレージ ポリシーを構成できます。

[次] をクリックして続行します。



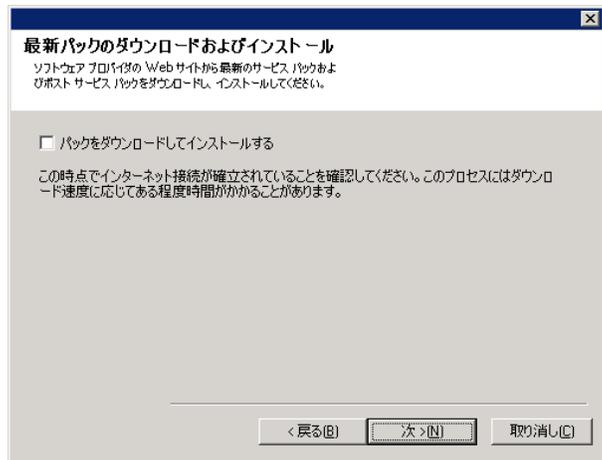
サービス パックのインストール

23. [パックをダウンロードしてインストールする] を選択して、最新のサービス パックおよびポスト パックをソフトウェア プロバイダからダウンロードしてインストールします。

ノート

- 更新をダウンロードするには、インターネット接続が必要です。
- このステップは、最初のインスタンスにインストールする場合に適用されます。
- 更新は、以下のディレクトリにダウンロードされます。
<software installation>/Base/Temp/DownloadedPacks.
これらは、サイレントに開始され、最初のインスタンスに自動的にインストールされます。

[次] をクリックして続行します。



インストール オプションのサマリの確認

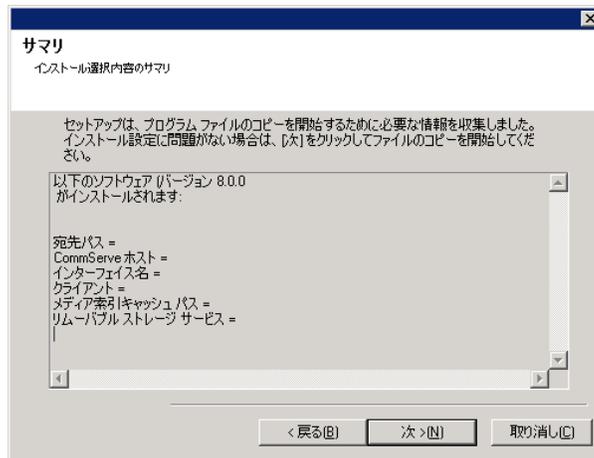
24. 選択されたオプションのサマリを確認します。

ノート

- 画面の [サマリ] には、インストールすることを選択したコンポーネントが表示されます。この表示は、例とは異なる場合があります。

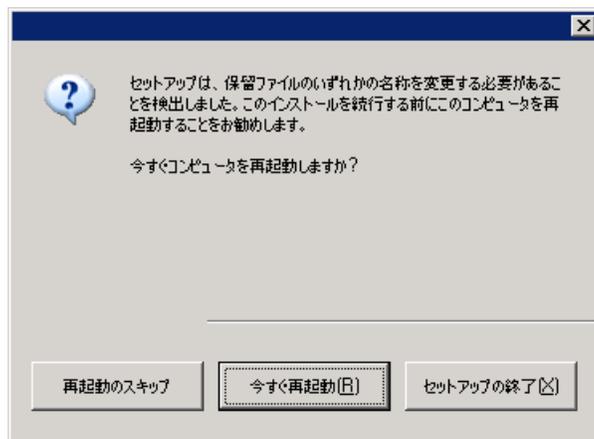
[次] をクリックして続行するか、または [戻る] をクリックしてオプションを変更します。

これで、インストール プログラムによって、コンピュータへのソフトウェアのコピーが開始されます。このステップは完了まで数分かかる場合があります。



25. システムの再起動メッセージが表示される場合があります。その場合は、以下のいずれかを選択します。

- [再起動のスキップ]
このオプションは、他のアプリケーションに属しており、置換が必要なファイルをインストール プログラムが検出すると表示されます。これらのファイルはこのインストールでは重要でないため、再起動をスキップしてインストールを続行したり、コンピュータを後で再起動したりできます。
- 今すぐ再起動
[再起動のスキップ] オプションなしでこのオプションが表示される場合は、インストール プログラムによって、ソフトウェアに必要であり、現在使用中で置換する必要のあるファイルが検出されたことを示します。[今すぐ再起動] が [再起動のスキップ] オプションなしで表示された場合は、この時点でコンピュータを再起動します。再起動後にインストール プログラムが自動的に続行されます。
- [セットアップの終了]
インストール プログラムを終了する場合は、[セットアップの終了] をクリックします。



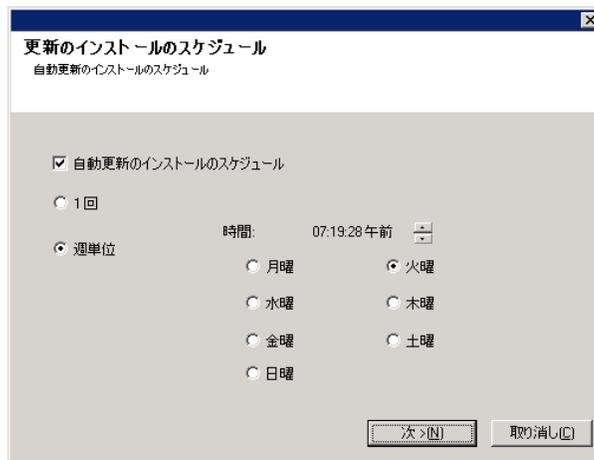
自動更新のスケジュール

26. 必要に応じて、ソフトウェア更新の自動インストールをスケジュールするためにこのオプションを選択します。

ノート

- "更新のインストールのスケジュール" を使用すると、必要なソフトウェア更新をコンピュータに 1 回または週単位で自動的にインストールできます。このオプションを選択しない場合は、これらの更新を後で **CommCell Console** からスケジュールすることができます。
- 競合を回避するために、ソフトウェア更新の自動インストールが、ソフトウェア更新の自動 FTP ダウンロードと同時に発生するようにスケジュールしないでください。
- サービスを再開する前に、コンピュータの再起動を求められる場合があります。
- コンポーネントが既にインストールされている場合この画面は表示されず、代わりに、インストーラは以前指定したのと同じオプションを使用します。

[次] をクリックして続行します。

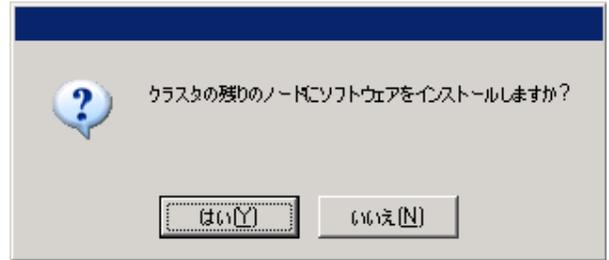


残りのクラスタ ノードのインストール

27. クラスタ環境内の物理ノードにソフトウェアをインストール/アップグレードする場合は、このオプションを使用して、クラスタの残りの物理ノードにソフトウェアをインストール/アップグレードします。

- クラスタの残りのノードでソフトウェアをインストール/更新するには、[はい] をクリックします。
- このノードでのインストール/アップグレードで完了する場合は、[いいえ] をクリックします。

ステップ バイ ステップの指示については、「[残りのクラスタ ノードのインストール/アップグレード](#)」を参照してください。

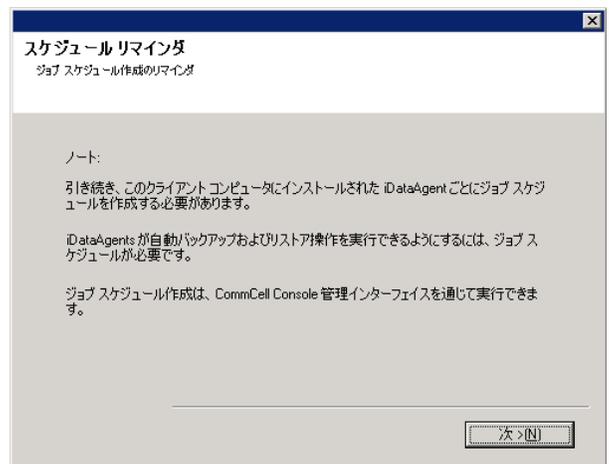


セットアップ完了

28. [次] をクリックして続行します。

ノート

- スケジュールを使用すれば、エージェントのデータ保護操作をユーザーの介入なしに定期的に確実に自動実行することが容易になります。詳細については、「[スケジューリング](#)」を参照してください。



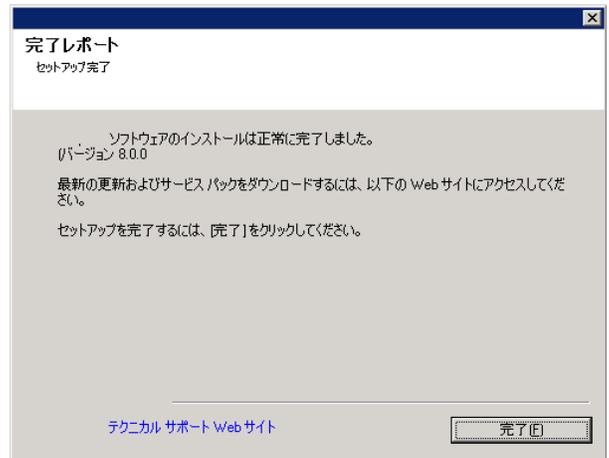
29. セットアップ プログラムによって、正常にインストールされたコンポーネントが表示されます。

ノート

- 画面上に表示された "セットアップ完了" メッセージには、インストールしたコンポーネントが表示されます。この表示は、例とは異なる場合があります。
- **CommCell Console** を開いたままエージェントをインストールした場合、新しいエージェントを確認するには、**CommCell Console** をリフレッシュ (F5) する必要があります。
- [今すぐ再起動] ボタンが表示された場合は、コンピュータで他の操作を実行する前にコンピュータを再起動してください。

[完了] をクリックして、インストール プログラムを閉じます。

これでインストールは完了です。



インストール後の考慮事項

一般

- このソフトウェアのリリース後に発表された、リリース後更新やサービス パックをインストールします。サービス パックをインストールする場合は、**CommServe** サーバーにインストールされているのと同じバージョンであることを確認します。または、[自動更新] を有効にして、**CommCell** コンポーネントの更新をすばやく簡単にインストールすることもできます。

- エージェントのインストール後、データ保護操作を実行する前にエージェントの構成を行うことができます。構成することができる最も一般的な機能を以下に示します。
 - サブクライアントの構成 - 詳細については、「[サブクライアント](#)」を参照してください。
 - データ保護操作のスケジュール - 詳細については、「[スケジューリング](#)」を参照してください。
 - アラートの構成 - 詳細については、「[アラートおよびモニタ](#)」を参照してください。
 - レポートのスケジュール - 詳細については、「[レポート](#)」を参照してください。

ソフトウェアには、この他にも便利な機能がたくさんあります。サポートされているすべての機能については、「[索引](#)」を参照してください。

エージェント固有

- Microsoft Virtual Server のバックアップの詳細については、「[Microsoft Virtual Server のバックアップに関連した考慮事項](#)」を参照してください。

障害復旧の考慮事項

- エージェントを使用する前に、関連するシステムの完全なリストア（または障害復旧）手順を再確認し、確実に理解してください。エージェントによっては、不測の事態が発生する前に、あらかじめ特定の操作を計画したり、特定の事項について考慮したりする必要がある場合があります。エージェントの詳細については、「[障害復旧](#)」を参照してください。
-

CommCell® Console の使用

グラフィカル ユーザー インターフェイスである CommCell Console を使用して、CommCell グループを制御および管理できます。CommCell Console を使用することによって、次の操作を始めとするさまざまな操作を開始できます。

- CommCell エンティティの構成 (ストレージ ポリシーなど) を確立および変更する
- バックアップ、リストア、または管理ジョブを開始またはスケジュールする
- 実行中のジョブをモニタする
- 完了ジョブの成功を評価する
- システム イベントをモニタする

CommCell® Console の開始

1. [スタート] | [プログラム] メニューから CommCell Console を開始するか、またはデスクトップ上の CommCell Console アイコンをクリックします。

CommCell ログオン情報ウィンドウが表示されます。

2. ユーザー名とパスワードを入力し、[OK] をクリックします。

これは、インストール時に [CommCell アカウント] ダイアログ ボックスに入力したユーザー名とパスワードです。

3. 評価用ライセンスを使用している場合は、警告プロンプトが表示される場合があります。続行するには、[OK] をクリックしてください。

直後に CommCell Console が表示され、すぐに使用できます。

CommCell® Console コンポーネント

CommCell Console には、CommCell ブラウザ、ジョブ コントローラ、およびイベント ビューアの 3 つのメイン コンポーネントがあります。

CommCell® ブラウザ

CommCell ブラウザには、CommCell グループのすべてのオブジェクトがツリー構造で表示されます。これらのオブジェクトは、クライアント コンピュータ、CommCell ユーザー、CommCell ユーザー グループ、ストレージ リソース、およびストレージ ポリシーの各カテゴリの下に表示されます。ブラウザは 2 つのペインに分割され、左ペインには CommCell ツリーが表示され、右ペインには左ペインで選択している CommCell オブジェクトに関する詳細情報が表示されます。

ジョブ コントローラ

ジョブ コントローラには、実行中の操作 (バックアップ、リストアなど) に関する情報が表示されます。このツールを使用して、イベントの表示、詳細の表示、ジョブの中止、一時停止、または再開を実行できます。ジョブ コントローラの詳細については、[Books Online](#) を参照してください。

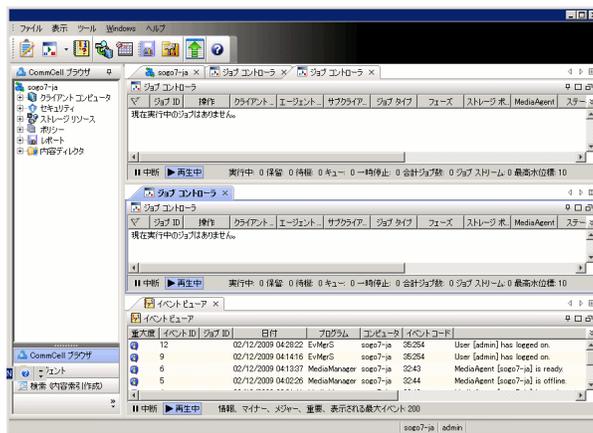
イベント ビューア

イベント ビューアには、ジョブによって生成されたイベントが表示されます。イベントごとに、プロセスに関する情報と、関連する重大度レベルが表示されます。イベントは、異なる条件に基づいてフィルタリングできます。イベント ビューアの詳細については、[Books Online](#) を参照してください。

言語のサポート

CommCell® Console は、さまざまな言語で表示できます。サポートされる言語の詳細については、「[サポート情報 - 言語](#)」を参照してください。

デフォルトでは、使用中のオペレーティング システムで現在実行しているサポート言語で表示されます。たとえば、Windows コンピュータで CommCell Console を実行している場合、[地域と言語のオプション] ダイアログ ボックスに設定されている言語がソフトウェアでサポートされていれば、その言語で表示されます。反対に、オペレーティング システムで実行している言語をソフトウェアがサポートしない場合には、CommCell Console は英語で表示されます。



オペレーティング システムで使用している言語とは異なるサポート言語で **CommCell Console** を実行する (たとえば、オペレーティング システムの実行言語が英語のときに、**CommCell Console** をイタリア語で実行する) 場合は、**CommCell Console** の Java コマンド パラメータを変更することによって、特定のサポート言語で実行するように **CommCell Console** を構成できます。ただし、サポート言語に適したフォントと文字がコンピュータで使用可能である必要があります。詳細な手順については、「[CommCell Console をスタンドアロン アプリケーションとして特定言語で実行する](#)」を参照してください。

データのバックアップ

CommCell® コンポーネントのインストールが完了したら、いくつかの基本操作を実行し、システムの使用準備を完了する必要があります。この章では、バックアップの実行、データのブラウズとリストア、iDataAgent のバックアップ履歴の表示など、このような基本操作の実行方法について説明します。詳細については、**Books Online** を参照してください。

バックアップの実行

バックアップするには、次の操作を行います。

1. CommCell® ブラウザで [クライアント コンピュータ] | <コンピュータ名> | [iDA File System] | [デフォルトのバックアップ セット] をダブルクリックし、[クライアント コンピュータ] を展開します。
デフォルト サブクライアントとその他のクライアント (使用可能な場合) が右ペインに表示されます。
2. デフォルト サブクライアントを右クリックし、[バックアップ] をクリックします。
[バックアップ オプション] ダイアログ ボックスが表示されます。
3. [バックアップ タイプの選択] ペインで [完全] オプションを選択します。
4. [ジョブの開始] ペインで [即時実行] オプションを選択します。
5. [OK] をクリックします。
バックアップの進行状況は [ジョブ コントローラ] ウィンドウで確認できます。

バックアップ履歴の表示

バックアップ履歴を表示するには、次の操作を行います。

1. CommCell® ブラウザで、デフォルト サブクライアントを右クリックし、[バックアップ履歴] をクリックします。
[バックアップ履歴フィルタ] ダイアログ ボックスが表示されます。
2. [OK] をクリックします。
[バックアップ ジョブ履歴] ウィンドウには、完了したばかりのバックアップ ジョブが表示されます (定期バックアップの実行を開始すると、そのサブクライアントのすべてのバックアップ ジョブのリストが表示されます)。
[ジョブ バックアップ履歴] ウィンドウ内の任意の行を右クリックすると、以下の情報が表示されます。
 - バックアップに失敗したファイル (ある場合)
 - バックアップ ジョブの詳細
 - バックアップ ジョブのメディア
 - バックアップ ジョブのイベント
 - バックアップされるファイルのリスト
 - ログ ファイル

データのブラウズおよびリストア

データをブラウズおよびリストアするには、次の操作を行います。

1. CommCell® ブラウザで参照するデータが含まれるバックアップ セットを右クリックし、ショートカット メニューの [バックアップ データのブラウズ] をクリックします。
2. [バックアップ データのブラウズ] ダイアログ ボックスで [最新データのブラウズ] を選択します。続行するには、[OK] をクリックしてください。
3. [バックアップ データのブラウズ] ウィンドウで、リストアするファイル、ディレクトリ、または両方を選択し、[選択対象をすべてリカバリ] をクリックします。
4. 使用するリストア オプションを [リストア オプション] ダイアログ ボックスから選択します。

リストア先を変更し、同一コンピュータ上の別の場所にデータをリストアすることをお勧めします。

[OK] をクリックしてリストア ジョブを実行します。

5. 実行しているリストア ジョブの進行状況は、[ジョブ コントローラ] または [イベント ビューア] ウィンドウで確認できます。
-

これ以後の操作

Express ソフトウェアのインストール、バックアップの実行、データの検証が完了すると、CommCell Console を使用して CommCell を管理できるようになります。以下を実行できます。

- バックアップのスケジュール
- レポートのスケジュール
- アラートの構成
- エージェントの追加
- およびその他多数の操作

バックアップのスケジュール

クライアントのインストールが完了すると、バックアップをスケジュールできるようになります。バックアップのスケジュールは、CommCell[®] グループ内のバックアップを定期的に自動実行する上で役立ちます。ブラウザ ツリーでバックアップ対象エンティティを右クリックして適切なメニュー オプションを選択することによって、ブラウザ ツリーのさまざまなレベルでバックアップをスケジュールできます。バックアップのスケジュールの詳細については、Books Online を参照してください。

バックアップのスケジュール方法：

1. バックアップするサブクライアントを CommCell ブラウザで右クリックし、ショートカット メニューの [バックアップ] をクリックします。
2. [サブクライアントのバックアップ オプション] から [完全バックアップ] と [スケジュール] を選択します。
3. [スケジュール詳細] ダイアログ ボックスにバックアップ ジョブのスケジュールを入力します。
4. [OK] をクリックしてバックアップ ジョブをスケジュールします。

レポートのスケジュール

バックアップの実行とスケジュールが完了しました。次に、日次管理のためのレポート（ジョブ サマリ レポート、監査証跡レポートなど）をスケジュールします。ソフトウェアによって、システムの全体的なステータスを日常的に確認する上で便利な多数の事前定義済みレポートが提供されます。レポートのスケジュールの詳細については、Books Online を参照してください。

- レポートをスケジュールするときは、次の操作を実行する必要があります。
 - [CommCell[®] プロパティ] ウィンドウの [全般] タブにメール サーバーと送信者のアドレスを設定する。
 - レポートの受信ユーザーを選択する。
 - これらのレポートの実行タイミング（日単位、週単位、月単位など）を指定する。

レポートのスケジュール方法：

1. CommCell ブラウザの [レポート] アイコンを選択するか、[ツール] メニューから [レポート] を選択します。
2. [レポート選択] 画面で適切なレポートを選択します。
3. 必要に応じて [レポート選択] 画面の [全般]、[時間範囲]、[出力] タブで任意のオプションを選択します。
4. オプションを選択したら、[スケジュール] をクリックします。[ユーザーと名前の選択] ダイアログ ボックスが表示されます。
5. [通知されるユーザー] フィールドにレポートの受信ユーザーを指定します。
6. [OK] をクリックします。[スケジュール詳細] ダイアログ ボックスが表示されます。[スケジュール詳細] ダイアログ ボックスで適切な項目を選択します。[OK] をクリックします。

アラートの構成

アラートは、特定イベントの発生、またはユーザー アクションの実行を CommServe[®] マネージャがメッセージ受信者に送信するメッセージです（バックアップ ジョブの成功または失敗、メディア下限しきい値未満へのライブラリの低下、磁気ライブラリの容量不足など）。このメッセージは、任意の電子メール アドレス、ポケット ベル、または両方に送信できます。

アラートを構成するときは、次の操作を実行する必要があります。

- [電子メールおよび IIS 構成] ダイアログ ボックスにメール サーバーと送信者のアドレスを設定します。
- [アラート追加ウィザード] ダイアログ ボックスでアラートを構成します。

アラートを構成するには、次の操作を行います。

1. CommCell Console の [ツール] メニューで [コントロール パネル] をクリックし、[アラート] をダブルクリックします。
2. [アラート] ウィンドウで、[追加] をクリックします。
3. [アラート追加ウィザード] ダイアログ ボックスに表示される手順に従います。
4. 設定が完了し、[サマリ] ステップでオプションを確認したら、[完了] をクリックします。
5. [アラート] ウィンドウにアラートが表示されます。[OK] をクリックします。

これで構成が設定されます。

その他の操作

ソフトウェアには、便利な機能が数多く用意されています。これらの機能の詳細については、[Books Online](#) を参照してください。

